

イデオロギーとテロル(一)

— 共產主義的全体主義独裁制における恐怖と狂気のシンフォニー —

小沼 堅 司

(目次)

一 「知識人の阿片」
林達夫「共產主義の人間」 〓 抽象的人民への愛と生身の人間の虐殺／ステイファン・ツヴァイク 〓 「思想の独裁」の恐ろしさ／モリス・マルクスのアイロニー／『共產主義黒書』 〓 共產主義のバランスシート／サルトル・カミュ論争 〓 革命的ニヒリズムと反抗的人間の倫理／階級的全体主義と人種の全体主義／レーモン・アロン、シモーニュ・ヴェーユ 〓 「知識人の阿片」としてのマルクス主義／政治的宗教によるロシア正教会と民衆文化の破壊／バートランド・ラッセル 〓 ボルシェヴィキの宗教的狂信と憎悪の独断論の告発／マルクス・レーニン主義の非情 〓 「餓死する民を救援するのは甘ったれた感傷主義である」／政治的宗教としての全体主義／ジョージ・オーウェル 〓 神なき宗教、メシアニズムの恐怖／『プラウダ』(真理)の社説以外に「イスチナ」(真理)はない／全体主義的救済 〓 プラトンの誘惑／指導者崇拜 〓 ナルシシズム幻想の共同化／一つの事例 〓 北朝鮮全体主義に憑かれた人々
(以上本号)

- 二 全体主義とは何か——原理的考察
- 三 右翼全体主義——ナチズム
- 四 左翼全体主義——共產主義

- (一) ボルシェヴィキによる権力奪取
 - (二) 「プロレタリアート独裁」と恐怖政治
 - (三) スターリニズム全体主義
 - (四) 毛沢東の大躍進政策と文化大革命の狂気
 - (五) 北朝鮮全体主義の悲劇
 - (六) カンボジア・ポルポト政権の虐殺政治
- 五 共産主義的全体主義の二十世紀

一 「知識人の阿片」

共産主義国家・党の政治宣伝の本質を、共産主義者のメンタリテイをふまえて最も鋭く剔出したのは、わが国では稀有なエピキュリアン、林達夫であった。林は『共産主義的人間——二十世紀政治のフォークロア——』（一九五一年）において、次のように述べている。

「ソヴェエト同盟のような共産主義国家においては、この政治宣伝というものが最も有効な政治的武器の一つになっていてそれをフルに利用しているが、これは何よりも人々を激情的風土——「風の如き」という共産主義者の好きな形容詞をそれに冠してもよい——のなかに置いて、ある緊密な政治的目標へ向かって突進させ、しかも人々がこのダイナミックの参加者あるいは輝かしい公共的偉業の分担者であるという感覚、いわば情緒的即融にひたらせる点に特徴がある。しかし宣伝は常に多少とも強調と誇大を伴うものであるが故にこのテクニク

の濫用にはある種の危険——実態の歪曲のそれがどうしても避けられない。」^①

この林達夫の文章は、一九五一年、つまりスターリン批判とそれに続く一連の東欧市民解放の運動——「ハンガリー事件」や「ポズナニ暴動」「ベルリン暴動」と称された反共産主義民主革命の試み——以前に書かれた。これは共産党の「同伴者知識人」(traveler's intelligentsia)が論壇を支配していた戦後日本においては稀有な洞察であった。林達夫は〈市井の市民の目〉としての〈フォークロア〉の視点と、〈モラリストの眼〉——いわば、正しい信仰の名において血で血を洗う宗教戦争の愚劣と恐怖を凝視し続けたモンテーニュ『エッセー』の精神——とをもって、共産主義者の政治宣伝が、人々に歴史的偉業に参加しているという激情を生産する仕組みを明らかにした。

また林は同様に、この〈モラリストの態度〉をもって、共産主義者の「倒錯的」な用語法とメンタリテイについて、「犯罪」という言葉を例にして次のように分析したことがある。——共産主義者は一旦政権を獲得すると、それから先は彼に反対し、彼を毀損するものは何であろうと一切許しがたき犯罪であると断定したがる人種である。それゆえ、「人民共和国」はその成立した途端にたちまちにして潜在的犯罪者の巨大なる貯水池と化してしまう。共産主義政権がこうした「犯罪」の発疹を未然に防ぐために思い切った予防措置を色々と講じたが、その一つの執行機関が秘密警察である。この彼ら特有の犯罪観念が共産主義者、少なくともその政治ボス型の指導者の中に必ず発現する「警察国家心性」の酵母であろう。

だが、これはメダルの裏側の話であり、表側のぎらぎらまぶしく光っている面は、共産主義者の言うことは絶対に間違いないという「無謬性」への信仰である。この無謬性の神話が共産主義者の党と指導者の独裁を正当化しているのだが、その行き着くところはさらに致命的な行為、すなわち、この神話の意味するところを受け付けること

のできない人々に対する迫害である。過つことのない党と指導者の至上命令に少しでも遲疑したり、逡巡したり、反抗したりすると容赦なく峻厳な懲罰の対象となる。だが、この迫害・懲罰は輝かしい真理による人間と社会の改造という究極の目的のために行われるのであって、迫害のための迫害ではない、と強調される。あくまで理想による教育的懲罰なのである。その結果、権力の独占（独裁）と真理の独占（イデオロギー）による無数の殺戮が行われた。ロシア革命以降の共産党・国家による犠牲者数は、二十世紀の後半、良心的な知識人たちが纏めた『共産主義黒書』よれば世界全体で優に一億人を超える。

このような共産党および偉大な指導者の無謬性の神話と、不可謬の命令に反抗する犯罪という表と裏の論理によって夥しい人間が「犯罪者」として殺され、懲罰労働を課せられた。文字通り「共産主義的ジェノサイド」である。林達夫は、共産党とその指導者の言うことに対する批判を反革命と同一視する共産主義的メンタリティ、そして犯罪を防止する機関ではなく、「犯罪者」を製造する機関に堕した秘密警察によって「人民の敵」や「反革命者」を周期的に捻出して処刑し、あるいは強制収容所に送り込む「共産主義的人間」の非人間性を、冷静な筆致で考察している。

「ソヴェエト共産主義三十年の歴史から私の受ける教訓のひとつは、抽象的人民の愛のために働き献身することとはたやすいが、いちいちの生き身をもった普通の人間のかげがえのなさ等重要さとを真に尊重し、人間性の実相に深く徴し、無限の忍耐といたわりとを以て、それらの人々の遲疑、逡巡、無気力等一切の欠点を長い眼で少しでも克服するように導いて彼らの幸福と安泰とを具体的にはかるといふことがいかに人間にとって至難の業であるかということである。⁽²⁾」

林達夫は、抽象的人民への愛によって生身の人間を抑圧し殺戮する「共産主義的人間」には、政治や社会、さらに人間に関してさえ、分かりきった「真実」を自分で考えてみることなどはもつてのほかだといわんばかりの心理的攻撃が含まれていること、この単純化された「真実」と絶対的な「善」に基づいて、一方では信じられないような自画自賛を行い、他方では「敵」に対する満身の憎悪をかき立てようとすることを明らかにした。

マルクス主義知識人の多くは、左翼政治で言う「真実」というものがいかに空々しく観念的なものであるかが分らなかつた（いまでもその傾向は否めない）。逆に、洪水のようなプロパガンダと激烈な政治運動の渦の中にあるときにも、日常時の散文的な作業に携わっているときでも、正しい歴史の創造の事業に参加しているという信仰によって自らを慰め、救済しようとした。この事業が一向に実現されなくても構わない。むしろそれは、理想や理念の純粋性を証明するのである。

優れた伝記作家S・ツヴァイクは、『エラスムスの勝利と悲劇』において、「思想の独裁」の危険性について次のように述べている。

「暴力衝動がある理念に奉仕するか、この理念がそれを利用するかした場合にはじめて、真の騒乱、血なまぐさい破壊的な革命が生じる。なぜなら、暴徒はスローガンによってはじめて党派となり、組織によってはじめて軍隊となり、信条（ドグマ）によってはじめて運動となる。人類の中で行われるすべての大きな、暴力沙汰を伴う葛藤の原因になるのは、血液と結ばれた人類の暴力意志であるよりも、むしろこの暴力意志を解きはなち、あらかじめ定められた人類の他の部分に対して駆り立てるイデオロギーなのである。狂信——或る一つの、しかも自分の、思想の独裁を唯一の許された信仰および生活の形式として、全世界にむり強いしようとするこの精神と

暴力の私生児——によつてはじめて、人間の共同体は敵か味方か、傾倒者か反対者か、英雄か犯罪者か、信者か異端かに分断される。狂信は自分の体系だけを承認し、自分の真理だけを容認しようとするものだから、どうしても暴力に訴えることによつて、神の意志にしたがつて多様な現象のなかの、他のすべてを抑圧することになる。」

「理想というものは現実で勝鬨をあげえないものでも、ダイナミックな力を發揮する。いや、実現されない理想であればあるほど、それは不死身な理想であることを表すのだ。実現されない理想や理念は、それだからいつて敗北したのでもなければ、誤りを立証されたわけでもない。反対に、実現されることによつて消耗されたり、墮落の危険にさらされたりしたことはない理想だけが、いつの時代にも生きつづけるのである。」³⁾

これは、「神の意志」に従つて教会の墮落を糾弾したルターをはじめ、あらゆる狂信とそれが孕む暴力的衝動の危険に対して、言語の理性によつて戦つた『痴愚礼讃』の著者で西欧知識人の原型といわれるエラスムスの人文主義と人道主義の精神に関連して述べたものである。エラスムスは、世界の多様性を無視あるいは拒否し、「すべての価値を一つの分母に通分し、すべての花を一つの形式や色彩に還元する狂信者や体系家」の危険性を警告し続けた。

ツヴァイクのいう実現されぬ理想や理念の不死身性は、西欧や日本の知識人にとってのマルクス主義にこそあてはまるといってよい。知識人は、実現されない理想であるがゆえに純粹であると、幻想の中で信じてこられた。日本においてマルクス主義が「現実的に」労働者大衆をとらえる以前に、「心理的に」知識人をとらえたのはそのためである。日本の知識人の間では、マルクス主義は、政治的な問題であるよりも精神的な問題であつた。

とりわけ、教会の精神的權威に匹敵するものがなかった明治以後の日本の知識人にとって、マルクス主義は、西欧におけるよりもはるかに宗教的性格を帯びていた。現在の悪と苦しみを否定し永遠に生きようとする宗教が民衆をとらえたように、資本主義社会を否定し、階級なき共産主義社会というユートピアを志向するマルクス主義は、知識人の心情をとらえたのである。

その意味では、R・タッカーがいうように、マルクスは「政治経済学のイデオムで語ったモラリスト」であった。『資本論』は「資本制経済システム」を現実即して分析した経済学であるよりも、「人間の自己疎外の経済学」であった。マルクスは、実際の経済史から資料を引いて資本主義を記述し、あたかもそれが経済的現実であるかのよう描写したが、彼自身の時代においてさえ現実の資本制経済システムの記述としての妥当性を欠いていた。現実の経済システムは、「資本蓄積の絶対的な一般法則」や「プロレタリアートの絶対的窮乏化」などマルクスが定式化した法則なぞに従ってはいなかった。そして歴史は、最終的な破局のエピソードどころか、もろもろの社会的・政治的圧力や運動によって福祉国家といわれるポスト資本主義へと発展してきた。だが、この経済的現実を説明した西側のマルクス主義者は「修正主義」というレッテルを貼られ、ドグマティストによって沈黙させられた。タッカーは次のように述べている。

「逆説的であるが、二十世紀の半ばの西洋社会の人々の関心を最も惹きつけるマルクス思想の側面は、純粹にユートピア的な面である。言い換えれば、科学的と称するかれの資本主義分析はまったくユートピアであるが、彼の将来世界に関するユートピアの見通しは、少なくとも現実の可能性を孕んだ予言であった。たとえば現代のアメリカでは、マルクスの共産主義概念はかれの資本主義概念より適用可能である。ここに深いアイロニーがあ

る。」

「マルクスの共産主義思想の社会的な空虚にもかかわらず、マルクス本人は将来社会像を描こうとした社会主義者を嘲笑したが、それは彼自身の思想の中核にあった共産主義は自己関係における共同性の再建であり、『人間の自己自身との本質的な統一』だったからである。『崩壊しつつあるブルジョア社会が孕む新しい社会の要素』は、すべての生ける諸個人と産業の形態において外在化された人類の内部にある人間的自己の創造的諸力であった。」

生身の働く人々ではなく、観念によって生きる知識人を心情的にとらえたマルクス主義は、現実の歴史においては想像を絶する悲劇をもたらした。マルクスレーニン主義によって知的武装をした共産党による恐怖政治は、二十世紀、否、二十一世紀でさえ、膨大な犠牲者を生み出した。『共産主義黒書―犯罪・テロル・抑圧―ソ連編』（一九九七年）の序文を書いたステファヌ・クルトワは、二十世紀における共産主義の犯罪による死者数を中国六、五〇〇万、ソ連二、〇〇〇万、北朝鮮二〇〇万、カンボジア二〇〇万、東欧一〇〇万、ヴェトナム一〇〇万、ラテンアメリカ一五万、アフリカー七〇万、アフガニスタン一五〇万、国際共産主義運動と政権についていない共産党一万人、計約一億人という数字を挙げた。これには様々な手段で行われた死刑（銃殺、絞首、溺死、撲殺、毒ガス殺、毒殺、自動車事故、飢餓による皆殺し）や、人為的な餓死、強制収容所送りや強制移住のさいの死、抵抗したときの死、強制労働（衰弱、病氣、飢え、寒さ）による死が含まれる。この共産主義犯罪のバランスシートは、とくにフランス人読者の間でセンセーションを巻き起こした。だが、共産主義の幻想に惑わされなかった人々にとって、これほどまで真実が公衆に届いていなかったことのほうが驚きであった。ソルジェニーツインの『収容群島』や中

国の文化大革命、毛沢東の大躍進運動・文化大革命における膨大な死者（五、〇〇〇万を超える）、そして僅か三年半の間に全人口の四分の一を全国的な飢餓や拷問や処刑で殺したカンボジアのポル・ポト派の犯罪、一九九〇年代後半の北朝鮮における人口の七分の一に及ぶ餓死（三〇〇万人）を知る者にとっては、二十世紀末まで真実が閉ざされていたことのほうが驚きであろう。

共産主義体制の本質は、体制が生んだ飢餓を検証することによって明らかになる。二十世紀の時代に何十万、何百万、何千万という死者を出したのは共産主義国だけだからである。『黒書』はこれらの犯罪のバランスシートを掲げ、ナチスを裁いたニュルンベルグ裁判所規約第六条cの「人類に対する罪」や「ジェノサイド」の罪に該当すると主張している。（同じくポーランド分割やバルト諸国、北プロヴィチ、ベッサラビアのソ連への併合を取り決めたヒトラーとの独ソ不可侵協定と秘密議定書、それに一九三九年十一月三〇日のフィンランド侵略だけでも第六条a「平和に対する罪」に該当する。また一九四〇年に二万五、〇〇〇人以上のポーランド将校を処刑し多数の市民を迫害した「カチンの森」虐殺事件や占領下ドイツでの赤軍兵士によるドイツ婦人に対する夥しいレイプ、共産主義政権に対してレジスタンス運動を行った人々に対する投獄、処刑、強制収容所送りなどは第六条b「戦争の罪」に該当する。）また一九九二年の新しいフランス刑法は、「人類に対する罪」を「政治的、哲学的、人種的もしくは宗教的動機に基づく、一般市民に対する組織化された実行計画による強制収容、奴隷化、あるいは正式の手続きを踏まない組織的な大量処刑、大量誘拐、拷問、非人道的行為」と規定した。これらの定義は共産主義体制のすべての国で行われた犯罪にあてはまる。

共産主義体制の犯罪のバランスシートは以下の通りである。

- ― (ボルシェヴィキ政権下で――引用者注) 一九一八年から二二年までの間に、何万という人質や囚人が裁判もなしに銃殺されたり、何十万と言う労働者と農民が反乱を起こして虐殺された。
- ― (同じく) 一九二二年の飢餓によって五〇〇万の死者が出た。
- ― 一九二〇年のドン・コサツクの殺戮と強制移住。
- ― 一九一八年から一九三〇年の間に何万と言う人が強制収容所で虐殺された。
- ― 一九三七年～三八年の大粛清の期間に、約六九万人が殺戮された。
- ― 一九三〇年～一九三二年の間に、二〇〇万のクラーク(もしくははそう見なされた人々)が強制収容所に送られた。
- ― 一九三二年～三三年に、ウクライナにおいて六〇〇万の人々が、人為的な飢饉によって救済されずに皆殺しにされた。
- ― 一九三九年から一九四一年にかけて、継いで一九四四年から四五年にかけて、何十万というポーランド人、ウクライナ人、バルト人、モルダヴィア人、ベッセラビア人が強制移住させられた。
- ― 一九四一年にはヴォルガ・ドイツ人が強制移住させられた。
- ― 一九四一年にはクリミア・タタール人が強制移住させられ、棄民となった。
- ― 一九四四年にはチェチエン人が強制移住させられ、棄民となった。
- ― 一九四四年にはイングーシ人が強制移住させられ、棄民となった。
- ― 一九五〇年以降、中国人によって、チベット人が緩慢な根絶やしにあった。⁽⁵⁾

この途方もない人間に対する犯罪がなぜ断罪されてこなかったのか。ナチスの犯罪を「人類に対する罪」と断罪することをためらわない西側の共産主義者と左翼の多くの人は、共産主義の犯罪に盲目となるだけではなく、その犯罪を社会主義の勝利のための貢献とさえ見做した。かれらは、共産主義の犯罪を無視・隠蔽・歪曲しながら、共産主義体制とその首領を讃える歌をうたい続けた。この犯罪の無視とユートピアの夢想の根底にあるのは、『ソヴェトの悲劇』の著者マーチン・メイリアの言葉を借りれば、「大いなる犯罪に行きついた大いなる理想のパラドックス」であった。このパラドックスについて、ブルガリア生まれのフランスの思想家ツヴェタン・トドロフは、長年ブルガリアの共産主義支配に服してきた経験を踏まえて、次のように述べている。

「西欧的民主主義の中に住んでいる者は、全体主義は通常の人間の希求とはまったく無縁のものだと信じたがる。しかし、もしそうだったら全体主義があれほど多くの人を巻き込んで、長いこと存続することはなかったことだろう。それは反対に恐るべき効率をもった仕組みなのだ。共産主義のイデオロギーはよりよい社会へのイメージを描いて見せて、我々に憧れの気持を抱かせる。理想の名において世界を変革しようと望むことは、人間が人間であることの不可欠な一部ではないだろうか？（…）その上、共産主義社会は個人が責任を取ることなくしてしまふ。決定するのはいつも『彼ら』だからだ。責任をとることは、しばしばしんどいものだ。（…）きわめて多くの個人が無意識に感じた全体主義システムの魅力は、自由と責任に対するある恐怖からきている。このことが全体主義体制の人気を説明している（E・フロムの『自由の恐怖』の主題はまさにこれだ）。ラ・ボエシエーが言っていることだが、『自発的隷従』が存在するのだ。⁶」

ここに西欧の知識人や左翼の共産主義の犯罪に対する盲目の理由がある。かれらはナチスの犯罪と共産主義の犯罪とともに認めることを拒否した。その理由は、第一に、革命の理念そのものを信奉し、自らの人生をその信念によつて意味あるものにしたという革命的情熱である。共産主義が人類の未来について明るい展望を描いて見せ、実際の諸矛盾を隠蔽してソ連社会を理想の国のように思わせたのは、この信条に心酔であった。かつてサルトル／カミュ論争で、サルトルが「ピランクル（の労働者）を絶望させないためにソ連の収容所については黙っているべきだ」と述べたのはその典型である。それに対してカミュは、眞実は眞実だ、それを否定することはヒューマニティとモラリティの双方を無視することになると答えた。

思えば、カミュが論争の発端になった『反抗的人間』を出版したのは、林達夫が『共産主義的人間』を発表したのと同じ一九五一年であった。洋の東西において同時に、孤立を恐れずに、唯物史観という歴史法則を神格化し、その神の司祭であり、教会であると主張する者たち（共産党）がその教義を暴力的に実現しようとしたことについて沈黙を守ることがは道德の崩壊であり、良心の放棄であると主張したのは例外的であったというべきである。十九世紀以降の多くの思想家が神という絶対者を否定して思想を構築してきたが、カミュもまた、神に代わる絶対者の出現に反抗し、否定することによって、人間の生命の尊重という観念を守ろうとした。マルクス主義者はイデオロギーを絶対視し、革命的手段を用いて恐怖政治を行つても地上に神の王国を建設しようとし、そこに歴史の目的を置いている。カミュは、この歴史への奉仕という目的のためにはいかなる犠牲も厭わず、革命のニヒリズムと恐怖政治を正当化しようとした共産主義とその同伴者を批判した。カミュは、左右の全体主義が行つた収容所での拷問、強制労働、処刑などのテロルを人間性と人間の自由の名において批判したのである。

第二に、これと密接に関連しているが、労働者階級に対するコンプレックスと罪の意識がある。カミュがいうよ

うに、「ブルジョアのインテリの場合、悔恨の念があつて、たとえ矛盾を犯し、知性に暴力を加えてでも彼らの出身の償いをしようとする」心性が共産主義の犯罪に目をつぶらせたのである。⁽⁷⁾

第三に、ソ連は第二次世界大戦において連合国（民主主義陣営）の一員であつたのであり、ファシズムに対するレジスタンス闘争とその殉教者、ナチズムに対する勝利、その過程における非共産主義者との連帯などの遺産を有していた。敗北したナチズムは連合国によつて「絶対的な悪」と名指しされたので、反対に共産主義者はほぼ自動的に「絶対的な善」の陣営に入れられた。ナチスのジェノサイド・システムの撲滅に寄与した人々自身が、どうして同じ方法を実践しえたなどと想像できようかというわけである。ニュルンベルグ裁判の時に、ソ連が検察側にいたのは当然だつた。「独ソ不可侵条約」や「カチンの森」事件など民主主義的価値観から都合の悪い事柄は隠蔽された。また、赤軍による東欧の解放が独裁体制の創設であつたことがほとんど知られていなかった。

第四に、ナチスはイデオロギー的儀式なしで殺したが、共産主義体制はモスクワ見世物裁判のように、政治的、道徳的反対派に対し自白を強要し、党の政治路線の「正しさ」を認めさせたうえで、自らの有罪を承認させることに努めた。詳細は後述するが、西側の同伴者知識人や左翼は、この巧妙な共産主義演劇支配制 (theatrocracy) に騙され、強力なプロパガンダに鼓舞されて共産主義犯罪の共犯となつた。

いまや、ヒトラーの全体主義とレーニン、スターリンの全体主義、毛沢東の全体主義を無視して歴史を語ることはできない。全体主義の犠牲者に敬意を払うことは倫理的義務である。二十世紀の様々な悲劇を再構成することは人間の記憶の義務である。『共産主義黒書―犯罪・テロル・抑圧―ソ連編』の序文でステファヌ・クルトワは、共産主義的全体主義独裁制 (communist totalitarian dictatorship) を「階級的全体主義」と名付け、それが西側の人たちの心をとらえたのはなぜかを改めて問い、ナチズムの「人種的全体主義」のホロコーストに匹敵する、否、はる

「〈階級的全体主義〉の差別と排除のメカニズムは、〈人種的全体主義〉のメカニズムに類似したものとなった。将来のナチスの社会が、「純粋な人種」を基礎に作られねばならないように、未来の共産主義社会は、あらゆるブルジョアの汚物から拭かれたプロレタリア的民衆の上に打ちたてられるべきだとされた。排除の基準は違っても、これら二つの社会の建設は同じように構想された。したがって共産主義がユニヴァーサルイズムだと主張するのはまちがっている。たとえそれが世界的使命を計画に持っているとしても、ナチズム同様、共産主義は人類の一部を生存に値しないと宣言しているからだ。相違があるとすれば、それはナチスが人種的、地域的に区分するのに対して共産主義は階層・階級によって区分している点である。レーニン主義、スターリン主義、毛沢東主義の悪業とカンボジアの経歴は、したがって人類に対して——とくに法律家と歴史家に対して——新しい疑問を投げかける。敵対する個人またはグループではなく、政治的・イデオロギー的理由から、大規模な形で社会の一部を根絶しようとするこの犯罪は、なんと名付けたらよいのだろうか。何人かのアングロ・サクソンの研究者は『policide』（政治的殺人）という言葉を提案している。あるいはチェコの法律家のように『共産主義的犯罪』とよんだらいいだろうか。⁸」

この膨大な政治的殺人（「階級的ジェノサイド」を生んだマルクス主義は、レーモン・アロンの言う「知識人の神話」であり、「知識人の阿片」であった。彼らは〈生身の人間〉ではなく、〈抽象化されたプロレタリアート〉の解放を夢想した。その解放は物象化された社会からの人間の救済であり、いわば最後の審判による至福千年の到来

である。アロンは、一九五五年に刊行した『知識人の阿片』において、マルクス主義の宗教的性格を指摘し、共産主義の自由の王国をキリスト教の予言と対比している。「知識人の阿片」という表題は、マルクスの「宗教は人民の阿片である」という有名な命題と、ロンドン亡命時代の僚友シモーヌ・ヴェイユの次のような言葉に基づいている。「マルクス主義は語の最も不純な意味において完全な宗教であり、マルクスの適切な表現を借りるなら、人民の阿片として用いられてきた」のである。代用宗教としてのマルクス主義は、十九世紀の終わりころからキリスト教の力が衰えるのに応じて、これに代替するものとして知識人のあいだに広がっていった。文字通り、「知識人は宗教を求めていた」のである。

「共産主義は、教会の精神的活力や権威が衰えようとしていた時代に、経済・政治学説から発展してきたものである。他の時代なら厳密に宗教的信仰という形をとって現れたと思われる情熱が、政治的行為にはけ口を求めたのである。」

「マルクスの予言は、ユダヤ・キリスト教の予言の典型的な型を模したものである。すべての予言は、現在の状況を非とし、それはいかにあるべきか、そして世界はいかに変わるか、その見取図を提示すると同時に、無価値な現在から輝かしい未来を隔てる障害にいどんで、道を切り開く使命を担うべき個人とかグループを選別する。社会の進歩をもたらす階級なき社会は、理想的な千年説（キリストが再臨して千年間地上を支配するという説）の夢に比べうるものである。プロレタリアが悲惨な境遇に置かれていることこそ、その使命を証明するものであり、党は教会となる。この教会は福音に耳を貸そうとしないブルジョアすなわち異教徒や、みずからは長いこと前触れていたのに革命を認めようとしなない社会主義者すなわちユダヤ人と対立する。」⁹⁾

アロンのこのようなマルクス主義に対する批判の底には、社会と人間に対する現実主義的な判断と人間性に対する配慮があった。それは、アロンの懐疑主義の方法によるものである。『回想録』でアロン自ら次のように述べている。

「宗教的経験は、倫理的な徳と教会への恭順とをどの程度まで明確に識別できるかによって、その真価が変わる。世俗宗教は、ドグマを捨てると、たちまち世論に浸食される。だが、奇跡的变化にも革命にも計画にも期待しない人間が、容認しがたいことに甘んじる義務はない。そのような人間は、人を愛し、生きた共同体に参加し、真理を尊重しているのだから、抽象的な人間性や、圧政的党派、不条理な形式主義に魂を売り渡しているのではない。」

「人間は、まだ殺し合いの機会と動機を見逃すところまではいってはいないのだ。寛容が疑いから生まれるのなら、手本やユートピアを疑うことを教え、救いの預言者、破局の予告者を忌避することだ。狂信主義の火を消しうるのなら、懐疑論者の到来に望みをかけようではないか。¹⁰⁾」

ここで、共産主義的千年王国の予言と願望を示す一つの例を挙げておこう。一九一八年、ロシアにおいて革命一周年を記念する祝典劇（マヤコフスキー「ミステリア・ブッフ」）が上演された。それはユートピア、つまり革命ロシアがこの地上で実現するはずの「約束の地」にたどり着く物語である。革命の洪水に浸された「汚い人々（プロレタリアート）」は、巨大なノアの方舟ののって世界を漂流し、地獄、天国を遍歴したあげく、ようやく最後に「約束の地」に着く。

「おれたちは奇跡を演じる者たち

光の雲を電気で掃くため

光を箒の束のように集めるのだ

世界中の川に蜂蜜を流し込み

地上の通りをあまたの星で舗装しよう

掘れ！

打て！

挽け！

穿て！

全員、ウラー！^①」

だが（〈約束の地・カナン〉はまもなく狂気と恐怖の支配する牢獄となり、ザミヤーチン（『われら』の著者、一九二二年亡命）ら反ユートピア作家でさえ予期でしなかつたような恐ろしいラーゲリ国家となった。

このように集団的救世主の前衛である党は、共産主義の「約束の地」の到来という救済のお告げを示し、それを守る使命を果たす。党すなわち教会は、教義を強固なドグマと化せしめ、煩瑣なスコラ哲学を作り上げ、膨大な群衆に情緒的生命を吹き込んで帰依させる。今日は苦難の道を歩んでいるがゆえに、明日は階級なき理想社会を実現するのだというメシア的結合力を発揮しなければならぬ。だが、この希望は自然発生的な力によって実現されるのではなく、暴力によって果たされる。またこの党（教会）においては苦悩する人びとへの愛は、弁証法によって

否定される階級と個人に対する冷酷によって支えられなければならない。共産主義の信仰はどんな手段も正当化し、共産主義の希望は神の王国に至る道が多様であることを認めず、共産主義の愛は敵が名誉ある死に方をする権利さえ認めない。共産主義のドグマとスコラ哲学が結合すると、客観性の論理と倫理は無視され、あらゆる事実はどのようなにも改変可能となり、都合の悪い歴史は書き換えられる。

それゆえ、世俗的宗教としてのマルクスレーニン主義によって武装した革命政権は、キリスト教をはじめとして宗教を厳しく禁圧した。集団的救世主としての党は、とりわけ人民救済のために「民衆の阿片」であるロシア正教と教会を徹底的に弾圧した。救済のためには古い迷信や偏見を削ぎ落とし、まっさらな精神に新しい教義を注入しなければならぬというわけである。

レーニンも、このような戦闘的無神論の情熱に囚われていた。かれによれば、まさに「宗教は民衆の阿片である。」「宗教は他人のための終身の労働と困窮と孤独にうちひしがれた人民大衆の上に、至る所で覆いかぶさっている精神的圧政の一形態」であり、「一種の精神的下等火酒」であって、「資本の奴隷」は人間らしい生活への要求をこの酒で紛らわしている。「社会主義と宗教」「マルクス主義は、現代のすべての宗教と教会、ありとあらゆる宗教団体が労働者階級の搾取を擁護し、彼らを麻酔させる役をするブルジョア反動の機関であると考えている。」またレーニンは、一九一三年の作家ゴリキー宛手紙で、激しく宗教を弾劾している。ゴリキーはある論文で「神とは、種族、民族、人類によって練りあげられた観念、個人を社会と結びつけ、動物的個体主義を抑制することを目的として、社会的感情をめざめさせ、組織する観念の複合体である」という思想に基づき、「神を作る」ことを主張した。「生活は創造されるものである」とすれば、それに必要な「神々はつくりだされるものである」という主張である。レーニンは、「求神主義」も「創神主義」も「建神主義」もみな「黄色い悪魔と青い悪魔」ほどの違

いしがなく、「あらゆる思想的腐敗」の温床であると弾劾した。

「あらゆる宗教的観念、あらゆる神にかんするあらゆる観念、さらにすべて神に媚態をしめすことでさえ、すべて民主主義的ブルジョアジーがとくにおおらかにむかえる筆紙につくしがたい醜悪事であるからこそ、これは最も危険な醜悪事であり、もつとも忌まわしい『伝染病』というのです。百万もの罪悪、卑劣事、愚行、肉体的伝染病なら、しゃれた『観念的』な衣装をまとった巧妙な、精神的な、神の観念にくらべれば、はるかに容易に群衆もこれを暴露し、したがって危険の度合いもはるかにすくないのです。」

「個人的見地からではなしに、社会的見地からすれば、あらゆる創神主義は『絶望し、疲れきった』俗人や小ブルジョアの愚かな小市民根性の、もろい俗物根性の、空想上の『自己侮蔑』の、うぬぼれた自己観照にほかなりません。(…)きたならしい小市民根性は、どこでもおなじように醜悪であり、思想的腐敗にかかった『民主主義的小市民根性』は二倍にも醜悪だからです。¹²⁾」

そのような考えに基づいて、レーニンはロシア・ソヴィエト共和国の当初の憲法草案に盛り込まれていた「宗教は市民の私事である」という規定に異議を唱え、「宗教的および反宗教的宣伝の自由」を保障する、と改めさせた。それは、ポリシエヴィズム政権の激しい教会および信仰迫害の根拠となった。

共産主義の希望が純粹であればあるほど宗教に対する弾圧はそれだけ苛烈となった。また、教会の政治的、社会的、精神的影響力が大きければ大きいだけ迫害も大きかった。ロシア正教会は革命に至るまで帝政ロシアの世俗権力を支える精神的権力として絶大な力を持っていた。そして数万に及ぶ教会と礼拝堂、数百の修道院を擁し、巨額

の教会財産を有する巨大な政治勢力でもあった。それだけに弾圧は過酷を極めた。正教会は破壊され、あるいは閉鎖された。十九世紀中葉、対ナポレオン戦勝を記念して民衆の寄付によって建立された「救済者キリスト教会大聖堂」も、当時の最高の画家たちの Fresco 画や彫刻ともども爆破された。貴重な聖像画や書物は火に焼かれた。僧侶たちは反革命分子として選挙権を剥奪された。食糧難の時代にもかかわらず食糧配給権が渡されず、そのため飢えた僧侶も多かった。かれらは大々的なデモを行って抗議した。一九一八年二月から五月にかけて各地でボルシェヴィキ政権と衝突し多数の死者と負傷者が出た。宗教デモを組織した僧侶たちは死刑となるか、ラーゲリ（収容所）に送られた。修道院は懲罰機関によって恐ろしいラーゲリと牢獄に姿を変えた。現在の正教会の中心をなすモスクワ・ダニローフ修道院は、厳格な規則をもつ幼少者のラーゲリとされたほどである。一九一九年一〇月、ときの総主教はレーニン政府に次のようなメッセージを送り抗議した。

「誰一人として我が身の安全を覚えるものとしてなく、万人が等しく強奪、逮捕、処刑がふりかかるのを恐れている。身を守るすべを持たない幾百の人びとが連日のように捕えられ、不潔な牢獄のなかでやせ衰え、審査と裁判に付されることもなく、あるいは諸君たちが演出する通り一遍の茶番裁判でもって処刑されていく。(……) 諸君たちは自由を約束した。誰一人として自ら食を得ることもできず、住居を変えることも、町から町へ移動することも許されないのが、諸君の約束した自由というものなのか。誰一人として反革命の廉で告発されるのを恐れるあまり自己の意見を公然と述べることもできないのが、諸君の公約した自由なのか。どこに言論、出版の自由があるのか。どこに説教の自由があるというのか。すでに多数の勇敢な教会の牧師たちが、彼らの血を、殉教者の血という代償を支払わされたのではないか。」

建物や生命といったフィジカルな犠牲だけではない。文化も弾圧を免れなかった。各教会の守護聖人の祝日である聖堂祭も、キリスト降臨祭も復活祭も三位一体祭も禁止された。教会での荘厳な婚礼の儀式は地区の戸籍係での結婚届に取って代られ、死者の教会葬も酔っぱらいの墓堀人の罵声に代わられた。このような宗教の禁圧とともに、民衆の日常生活を形づくっていた伝統や儀礼、民衆芸術も消滅を余儀なくされた。それらは長い間民衆の精神の支えであった。古い民謡は地域社会と家庭で歌われなくなって民俗学研究の専門書に記述されるだけになり、スターリン時代の手工芸品製造禁止令によって伝統的な民衆工芸もほとんど姿を消した。アレクサンドル・ドーンはこれを「過去を失った民衆」といつている。こうして、宗教の禁圧と民衆の伝統文化の破壊とともに、教会が担ってきたキリスト教道徳も失われ、善悪、真実と虚偽、誠実と不誠実、正直と偽善といった観念が駆逐された¹⁴⁾。

ロシア政治思想史家の勝田吉太郎氏は、この宗教弾圧における宗教的情熱という逆説的事態に注目して次のように述べている。

「『ロシア人にとって無神論は精神的欠乏ではなく、積極的信念である。彼らは信じるのをやめるのではなく、無神論を信じ、この信仰を狂信家の不寛容と熱中とをもって擁護する』とシューバルトは書いた。実際、ロシア革命以後にみられる宗教迫害のすさまじさは、ロシアの精神史に特有の刻印をはしなくも示している。いかに逆説的に思われようとも、無神論運動もそこではまぎれもない一種の宗教的情熱を帯びる運動と化しているのである。」

「無神論は精神的欠乏ではなく積極的な信念なのだ。彼らは信ずることを辞めるのではなく、無神論を信じ、この信仰を狂信家の不寛容と熱中とをもって擁護するのだ。」¹⁵⁾

このような世俗的宗教と化したロシア共産主義の現実をいち早く告発したのはイギリスの数理哲学者バートランド・ラッセルであった。ラッセルは、現実の不正に憤り、革命によってそれをただそうと心をくだいていた西欧の「良心的な」知識人の魂をとらえて離さなかったロシア共産主義が、いかに恐ろしい体制（レジーム）であるかを明らかにした。ラッセルは、一九二〇年にロシアを訪問し、レーニンら指導者と長時間にわたって話し合い、行われていることを可能な限り観察して、ロシアで行われているすべてのこと、目論んでいることすべてが、自由な世界観の人の誰もが持つ願望とは正反対であるという結論に達した。それは辛い経験であった。

「一九二〇年のロシア訪問は、私にとって人生の転換点だった。そこにいるうちに、私は恐怖が次第に強くなって、ほとんど耐えられないほどの圧迫を感じる。国全体が広大な牢獄で、牢獄の看守は残忍で偏狭な狂信者のようにみえた。友人たちはこれらの人たちを解放者と喝采し、彼らの創りつつある統治形態を極楽のようになっているのを見ると、こまってしまうて、狂っているのは友達の方なのか、それとも私なのかと疑ったが、他人よりも自分の意見に従う習慣が戦争中に強くなっていた。（中略）ボルシェヴィキについて考えていることをいおうと最終的に決めたとき、以前の政治上の友人たちは、その後私の意見に賛成するようになった多くの人たちも含めて、私をブルジョアジーの従僕とののしった。¹⁶」

ロシアの新しい革命政府を賞賛しなかったことによって彼は、「徹底した孤立」を強いられた。当時の左翼は、ロシア革命は「反動」によって反対され、革命の批判は「反動」を利することになるがゆえに、なにがあっても革命を支持すべきであると主張した。ラッセルは、ロシア革命の「悪の根源」は共産主義の「狂信」と「憎悪」にあ

ると考えた。かれは、ロシア・マルクス主義の中に「憎悪と力と専制的権力に基礎づけられた哲学」を見出した。そして、西欧における左翼が「ロシアの共産主義者は天国を創り出している」という欺瞞的認識と偽善的評価に凝り固まっているなかで、政治的、思想的孤立を強いられながらも、彼はあくまで、ロシア共産主義は憎悪と独裁権力によって「天国」どころか恐怖社会を作っているのだと訴えた。ラッセルは次のように述べている。

「(ロシア共産主義の) もう一つの誤りは、感じ方に関係しているが、よき事態は憎悪を推進力とする運動によって実現されうると思っていることである。主として資本家や土地所有者への憎悪によってかたてられた人たちは憎悪の習慣を身につけており、勝利をえてからも新しい嫌悪の対象を探し求めるようになる。こうして、人間のもつ自然の心理的メカニズムによって、追放(パージ)、クラークの虐殺、強制収容所等がやってくる。私は(中略)天国の代りに地獄を創ったのだと思う。」¹⁷⁾

「ボルシェヴィキは外の世界の敵意を挑発することによって、農民の敵意、ついには都市の工業人口の敵意あふれるいは徹底した無関心を挑発せざるを得なかった。これら多様な敵意は物的な破滅をもたらし、物的な破滅は精神的な崩壊をもたらした。この一連の悪全体の究極的な根源は、ボルシェヴィキの人生観にある。その憎悪の独断論、人間の本性を力によって完全に変えられるとするその信念にある。」¹⁸⁾

この憎悪の独断論と人間改造論を支えたのは、ボルシェヴィキの「宗教的な狂信」であった。カリスマ・レーニンもそうであった。「彼(レーニン)の信念は、いわばマルクス主義の福音にたいする宗教的な信仰である。」ちなみに指導者レーニンは死後、防腐措置を施されて赤の広場の霊廟に安置された。聖なるレーニンの「国家神殿」化

である。それは、儀礼の象徴作用と政治機能の全体主義的組織化の試みであるが、また革命以来宗教的本能を抑圧されてきた民衆の無意識の欲求にこたえようとする試みでもあった。

「ボルシェヴィズムは、たんに一つの政治理論であるだけではない。それは精緻な教義と靈感のこもった経典をそなえた一つの宗教でもある。」

「共産主義の希望はかつてのキリスト教と同じように熱狂的に信奉されており、同じように有害となるかもしれない。われわれの本能には残酷さがひそんでおり、狂信は残酷さをかくすカモフラージュである。狂信の輩はめったに真に人間的であることはない。」

「ほとんどすべての主要な悪は、宗教によっている。私が宗教というのは、独断として抱かれている信仰の体系を意味している。その独断は生活の振舞いを支配し、証拠を超越し、あるいは証拠に反し、知的ではなく感情的ないし権威主義的な方法で教え込まれる。この定義ではボルシェヴィズムも宗教である。その教義が証拠を超越え、あるいは証拠に反する独断であることは、後で証明することにしよう。ボルシェヴィズムを認める人々は科学的証拠を受け付けなくなり、知的に自殺してしまう。¹⁹」

ラッセルは、つねに「懐疑的な知性」によって、「ふさわしい明証をもたない教義を独断的・狂信的に信ずる」ことの危険性を訴えたが、ロシア共産主義に「天国」を見たいと望んでいる西欧左翼の「偏狭な熱狂者」たちは耳を傾けなかった。「自由主義の精神」によってこの種の「自己欺瞞」を撃ったその代償は、「荒涼たる孤独」であった。

ラッセルは「なぜ私は共産主義者でないか」という論文で、いかなる政治的原則に対しても二つの問い、すなわち、(一)その理論内容は正しいか、(二)その実際政策は人類の幸福を増大しようか、で判断しなければならぬといっている。その上で、共産主義の理論の原則は間違っており、その実践的格率は人類の悲惨をはかりがたいほど増大させるものだ、と批判した。彼は剰余価値の理論と階級闘争、唯物史観の歴史法則なるものを、理論とは程遠い「神話的な考え」に過ぎないと一蹴するが、見過ごすことができないのは、誤っているマルクスの理論がレーニンやスターリンの下で行われた発展によって一層悪いものになったことである。マルクスは、プロレタリアートが内乱で勝利をおさめた後で革命的な移行期が続き、この期間にプロレタリアートは、内乱後通常行われるやり方で征服された敵から政治的権力を奪取するということを教えていた。いわゆるプロレタリアート独裁である。マルクスの予言では、プロレタリアートの勝利は、プロレタリアートが人口の大多数を占めるまで成長した後でなくてはならぬ。しかし、

「一九一七年のロシアでは、プロレタリアートは人口の僅かな割合しかなく、大部分は農民だった。ボリシエヴィキ党がプロレタリアートの階級に目覚めた部分であり、その指導者の小さな委員会がボリシエヴィキ党の階級に目覚めた部分だということが宣言された。こうしてプロレタリアートの独裁は小さな委員会の独裁になり、ついにはスターリンの独裁となった。階級意識をひとり占めしたプロレタリアとして、スターリンは何百万の農民を飢餓によって死に追いやり、他の何百万を収容所の強制労働に追いやった。」「私はいつもマルクスに不賛成だった。」⁽²⁰⁾

マルクスは『経済学・哲学草稿』では——そしてその他の著作でも——共産主義社会はいかなる社会システムかについてはなにも述べていない。ただ共産主義運動と共産主義世界革命の不可避性を指摘するのみである。「私的所有の観念を超越するためには、共産主義の観念だけで十分である。しかし、現実の私的所有を廃止するためには、実際の共産主義運動が必要である。歴史がこれをもたらすであろう。われわれが、思想において自己超越運動として把握したこの運動は、現実には長く厳しい過程をたどるであろう。」^①

すでに「思想」において把握されたこの運動は、必然的に、「現実」に運動として展開されることを当然視して、マルクスは共産主義を考察している。その説明はたかだか十数頁でしかないが、かれの他のどの著作よりも詳細かつ具体的である。にもかかわらず、ここでは、マルクス以前と以後のどの社会主義・共産主義理論も考察してきた社会の経済的組織については、ほんの僅かの関心さえ示してはいない。計画化や財貨の分配、公共サービスの組織化や共同生活の制度などの問題については一言も触れられていない。キリスト教神学者がその著作で樂園における分配について一言も述べていないように、分配問題を検討しようという考えはマルクスには思いつかなかった。それは偶然ではない。彼は、共産主義の下では財貨は万人に溢れるほどあるということを当然視していたからである。『ドイツ・イデオロギー』第一巻「最近のドイツ哲学——その代表者フォイエルバッハ、B・バウアーおよびシュテルナーにおける——批判」では、非常に牧歌的に次のように述べている。「各人がどんな排他的な活動範囲をもつことがなく、どんな任意の部門でも腕をみがくことができる共産主義社会にあつては、社会が全般の生産を規制し、まさにそのことによって私に、今日はこれ、明日はあれをする可能性を与えてくれる。つまり狩人、漁師、牧者または批判者になるなどということなしに、私の気の赴くままに、朝には狩りをし、午すぎには魚をとり、夕べには家畜を飼い、食後には批判をする可能性である。」^②

マルクスの共産主義概念は、R・タッカーがいうように、基本的には哲学的あるいは宗教的である。²³それはヘーゲルの『精神現象学』をモデルにして仕上げた世界史の全体哲学の一部である。周知のようにマルクスは、ヘーゲルの弁論たる壮大な哲学体系の解体過程においてその思想活動を開始した。一八四四年に『独仏年誌』に発表した「ヘーゲル法哲学批判序説」と「ユダヤ人問題によせて」はマルクスの世界観を知る第一級の資料である。マルクスのプロレタリアート解放の聖なる試みは、宗教批判から始まる。

「宗教の批判こそあらゆる批判の前提である。(…)反宗教批判の根本は、人間が宗教をつくるのであって、宗教が人間をつくるのではないということである。そして宗教は、自己をまだかちえていないか、あるいはかちえながらもまた喪失してしまった人間の、自己意識であり自己感情である。しかし人間といっても、それは世界のそとにうずくまっている抽象的な存在ではない。人間、それは人間の世界のことであり、国家社会のことである。この国家、この社会が倒錯した世界であるために、倒錯した世界意識である宗教を生みだすのである。(…)宗教は、人間存在が真の現実性をもたない場合におこる人間存在の空想的な実現である。それゆえ、宗教に対する闘争は、間接的には、宗教を精神的香料としているあの世界に対する闘争である。

宗教上の不幸は、一つには現実の不幸の表現であり、一つには現実の不幸に対する抗議である。宗教はなやめるもののため息であり、心なき世界の心情であるとともに精神なき状態の精神である。それは民衆の阿片である。民衆の幻想的幸福としての宗教を廃棄することは、民衆の現実的幸福を要求することである。(…)宗教の批判は、したがって宗教を後光とするこの苦界の批判をはらんでいる。」

「宗教の批判は、人間が人間にとって最高の存在であるという教説でおわる。」²⁴

この「人間が人間にとって最高の存在である」という言葉は、フォイエルバッハの「人間は人間にとって神である」という定式を受け継いだものである。キリスト教の神を切り捨てたあとフォイエルバッハが頼ったのは、永遠の生命をもつ「人類」という偶像であった。だがマルクスは、此方における人間に奉仕するというフォイエルバッハの無神論的ヒューマニズム（「人類教」）を超えて、「苦界」としてのこの世の批判と解体を通じて人間を解放しようとした。

「ユダヤ人問題に寄せて」は、ブルーノ・バウアーの『ユダヤ人問題』と『現代のユダヤ人とキリスト教徒の自由になりうる能力』に対する論評という形式で叙述されている。そこで展開されている宗教批判は、のちの唯物史観と「上部構造」下部構造」の社会構成体論へと発展する基礎をなしているとともに、マルクスの人間観、社会観の原型を示している。

「（米国独立革命とフランス革命によって——引用者注）人間は、宗教を公法から私法へ追いやることによって、自分を宗教から政治的に解放する。宗教はもはや国家の精神ではなく、すなわち、人間が他の人間と共同して類的存在（Gattungswesen）としてふるまうところの国家の精神ではなく、市民社会の精神、すなわち利己主義の領域、万人の万人に対する戦い（bellum omnium contra omnes）の領域の精神となっている。宗教はもはや共同の本質ではなく差別の本質である。それは共同体からの、自分と他の人間とからの、人間の分離の表現となっている。」⁽²⁵⁾

マルクスはパワーを批判して、近代市民革命による政治的解放は、人間を「個人的生活と類的生活、市民社会

の生活と政治的生活」の二重の存在に切り刻んだに過ぎないという。「公民 (citoyen) から区別される人 (homme) とは誰か? 市民社会の成員にほかならない。なぜ市民社会の成員は『人間』、ただの人間と呼ばれ、なぜ彼の権利は人権と呼ばれるのか? 政治的国家の市民社会に対する関係、政治的解放の本質からである。」だが、市民社会の人の権利は、「利己的人間の、人間と共同体から切り離された人間の権利にほかならない。」それゆえ、宗教からの政治的解放は人間の解放を意味しない。宗教は「市民社会の精神」となり、「人間の人間からの分離と疎遠の表現」となる。宗教は「現実的な類的存在ではない人間」の幻想的救済である。「政治的解放そのものは人間的解放ではない。」²⁶⁾

マルクスによれば、人間は「貧弱な利己主義的喜悦 (egoistische Freude)」にふける限り「塵にひとしい人間 (Menschenkehrich) 」ではない。つまり無価値である。真の人間は「類的存在」という集团的自我、全体的共同性に溶融したときに初めて人間となる。更生した人間に生まれ変わる。それは「ヘーゲル法哲学批判序説」でいう共産主義社会である。だがそれは、人間が知識人 (哲人王) の設計する理想社会の歯車となることを意味している。

マルクスにとって歴史が発展過程あるいは人類の「なる」行為であるとすれば、共産主義はその歴史の終焉の始まりを画す真の存在 (being) としての人間の状態である。共産主義は、キリスト教神学者のいう彼岸の脱歴史の段階やヘーゲルの『精神現象学』最終章「絶対知」で描かれたこの世における歴史以後に対応して、マルクスのいう共産主義は地上における人間の歴史以後の状態である。それは、魂の救済という神学的観念のメタモルフォシスと考えると分かりやすい。人間は世界史を通じて自己疎外、非人間的な状態において存在してきたとすれば、共産主義は疎外の克服、つまり「自己の再獲得」「人間の再統合あるいは人間の自己自身への回帰」「人間の自己疎外の

超克」として描かれる。

マルクスによれば「社会の普遍的人間の解放」の担い手は「プロレタリアート」である。プロレタリアートは「普遍的苦悩のゆえに普遍的性格をもち」、「人間の完全な喪失であるがゆえに人間の完全な回復によってだけ自身を勝ち取ることができ」存在である。プロレタリアートは、「私有財産の否定」によって資本制社会の構造そのものを解体する。「プロレタリアートの原理」は、一階級でありながら階級としての自己の解放が全人類の解放につながるということである。プロレタリアートにおいては、「その階級の要求と権利が真に社会そのものの権利と要求になる」のである。

このようなプロレタリアートとは一種の宗教的用語である。「人間性の完全な喪失態」であるがゆえに「人間性の完全な回復」をめざす存在とされるプロレタリアートとは、勝田吉太郎氏がいうように、「実証的概念というより観念的なもの」である。それは日々額に汗して働き、子供の成長や家族の安泰を願う生身の現実的な人びとではない。それは「世界秩序の解体を告知」するという普遍的な役割を担わせられた抽象的な存在である。プロレタリアートがその実現の担い手となる未来社会（楽園）図を設計するのは、哲学者（知識人）である。プロレタリアートは、知識人によって歴史の必然（法則）とされた理想社会建設の歯車となる。

「哲学がプロレタリアートのうちにその物質的武器を見いだすように、プロレタリアートは哲学のうちにその精神的武器を見いだす。」この解放の頭脳は哲学であり、その心臓はプロレタリアートである。哲学はプロレタリアートを揚棄することなしには実現されず、プロレタリアートは哲学を実現することなしには揚棄されない。²⁷⁾」

この人間の解放とは何よりも宗教からの解放であるという初期マルクスの思想は、終生変わることはなかった。後に経済学研究を通じて定式化された唯物史観の公式(『経済学批判序説』)では、宗教は「實在的土台」(「物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係」)に規定される「イデオロギー諸形態」(「法律的、政治的、宗教的、芸術的または哲学的諸形態」)の一つに位置づけられる。「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する」というわけである。だがマルクスは、下部構造―上部構造の総体からなる「社会構成体」の変革(革命)においては、プロレタリアートの解放は、ブルジョア的生産様式下における資本の圧制からの解放であると同時に、宗教からの解放であるという見解を変えることはなかった。「経済的生産諸条件における物質的な、自然科学的に正確に確認できる変革」に対して、人間は「この衝突を意識するようになり、これと戦って決着をつけ」なければならなくなるとすれば、革命においては宗教(ブルジョアのイデオロギー諸形態の一つ)からも解放されなければならない。彼は『資本論』で次のように述べている。

「商品生産者の一般的に社会的な生産関係は、彼らの生産物に商品として、したがって価値として相対し、また、この物的な形態の中に、彼らの私的労働が相互に等一の人間労働として相連結するというところにあるのであるが、このような商品生産者の社会にとっては、キリスト教が、その抽象的人間の礼拝をもって、とくにそのブルジョアの発展たるプロテスタントイイズム、理神論等において、もっとも適応した宗教形態となっている。(…)現実世界の宗教的反映は、一般に、実際の日常勤労生活の諸関係が、人間にたいして、相互間のおよび自然との間の合理的な関係を毎日明瞭に示すようになって初めて、消滅しうるものである。社会的な生活過程、すなわち、物質的生産過程の態容は、それが自由に社会をなしている人間の生産物として、彼らの意識的な計画的な規

制のもとに立つようになってはじめて、その神秘的なおおいをぬぎずるのである。(…)

生産過程が人々を支配し、人間はまだ生産過程を支配していない社会形成体にぞくするということが、その額に書き記されている諸法式は、人間のブルジョアの意識にとつては、生産的労働そのものと同じように、自明の自然必然性と考えられている。したがって、社会的生産有機体の先ブルジョアの形態は、あたかも先キリスト教的宗教が、教父たちによってなされたと同じ取扱いを、経済学によって受けている。⁽²⁸⁾」

マルクスの共産主義のヴィジョンは、「終末論的なメシアニズム」(勝田吉太郎)である。未来の千年王国、共産主義の「地上の楽園」を実現するためには、資本制社会の矛盾がより急速に、全面的に露呈することを期待する。現在の生身の人々の生活が悪くなればなるほど、それだけ未来において人民は救済される。この人民救済の弁証法は恐るべき悲劇をはらんでいる。

一つだけ歴史的事例をあげよう。一八九一年―九二年の冬、ロシアのサマラ州を飢饉が襲った。飢えた農民は人肉を食べたといわれるほどの惨状を呈した。農民たちがパンを求めて都市に群がったとき、この困窮者たちを救済するための市民委員会が組織された。トルストイやチェホフらは救援のための募金活動に全力を注いだ。それに対して、レーニンらロシアのマルクス主義者は、餓死しつつある農民に食料を与えようという人道主義者を「甘ったるい感傷主義」として批判し、農民救済の博愛事業を拒否した。レーニンは次のように主張した。

「飢饉は特定の社会体制の直接的な結果である。この体制が存続する限り、飢饉は避けられない。飢饉はこの社会体制を廃止することによって、はじめて除去することができる。この意味で避けがたい飢饉は、今日、進歩

的な役割を果たしている。飢饉は農民経済を破壊し、農民を農村から都市に投げ込む。こうしてプロレタリアー
トが形成され、国家の工業化が促進される。」

「飢えたる者を助け、彼らの運命をより良きものにしたという、いわゆる〈社会〉の欲求は理解に難くない。
(…) 飢饉は深刻な社会的騒乱をもたらし、おそらくブルジョア体制そのものを破壊する恐れがある。従って、
裕福な者たちが、飢饉の影響を和らげようと努力するのはまったく自然である。(…) この飢えたるものに食料
を与えようとする企図は、心理的には、わが国のインテリゲンチヤの特徴である甘ったるいサッカリンのような
感傷主義でしかない。」

レーニンの本当の声が、初めて発せられたというべきである。レーニンは歴史の法則を加速させるためには「感
傷主義的」態度は排されなければならないという。矛盾が激化すればするほど全体的救済はそれだけ完全なものに
なるはずだからである。レーニンの認識によれば、農村経済が疲弊し大量の農民が都市に出てプロレタリアートに
なれば、資本主義はそれだけ進展する。資本制が前進すればするほどその矛盾が露呈し、階級闘争が激化する。階
級闘争が激化すれば、それだけ革命は近い。資本主義経済の歴史的発展法則の作用を邪魔するのではなく、それを
進行させることが正しい歴史的行為である、ということになる。マルクス主義革命家は「歴史の助産婦」とならな
ければならない、というわけだ。

この未来の抽象的人民の解放のために、現在の生身の人間の悲惨を放置するというロシア・マルクス主義者の非
人間性は、二十世紀の共産党政治において途方もない悲劇をもたらした。すでに『共産主義黒書』が明らかにし、
本稿の後の各章で詳細に分析する予定であるが、ここで勝田吉太郎氏の痛憤に満ちた告発を引用したい。

「やがてそれは、権力の座についたマルクス主義の共産主義建設の壮大な社会実験のなかで、あのおそるべき『収容所群島』の姿をとって結実する。故サハロフ博士によると、スターリン時代だけでもテロと粛清によって命を落とした人間は一、〇〇〇万〜一、五〇〇万人にのぼるといふ。他方ソルジェニーツィンによれば、革命後半世紀間の内乱、粛清、集団化など、社会主義建設の強行によって殺害され、或いは強制収容所の中で朽ち果てたものは、実に六、五〇〇万人にも及ぶといふ。将来の歴史家と人口学者たちは、ひよっとするとそれ以上にも達する犠牲者を数え上げるかもしれない。ソ連ばかりではない、およそ共産党政権が樹立された国々で広くみられる地獄図の光景とは「人間塵」さながらに扱われる人間たちのとほうもない犠牲なのである。ヴェトナム、カンボジア、エチオピアなど、ソ連や中国の共産帝国の周辺地域における事例は、すでに世界周知の事実となっている。(……) 人類、プロレタリアート、人民を『解放』するために、何万、何十万、何百万という生身の人間たちが命を奪われ、いてつく永久凍土の上に建てられた収容所にとじこめられ、或いは『ポート・ピープル』となつて荒海に漂い、難民となつて罪なき幼児ともども栄養失調でやせおとろえ衰弱死しなければならぬとは、『人権の世紀』という名で呼ばれるこの二十世紀が上演した、なんととほうもない悲劇であつたことか。」³⁰

全体主義的支配者は、大衆と人民の真の意思を代表しているがゆえに、自分たちこそが「現実の国家」を代表すると主張する。なぜなら、ブルジョア民主主義の法的虚構は、寄生的でエゴイステイックな特殊利益の道具である政党によって人民の統一を破壊し、麻痺させているのに対し、労働する生産大衆と利害を同一にする共産党のみが存在して、搾取者とその代表が抑圧されているプロレタリア民主主義こそ、「真の」民主主義であるからである。

全体主義イデオロギーは宗教を抑圧し、宗教に取って代わろうとする。それは、一方では、信仰と宗教的習俗

(慣習) による世俗的権力に対する抑制力を消滅させ、他方では、従来宗教において表明されてきたエネルギー(諸力)を二十世紀の全体主義体制の推進力とすることを目指している。それは、擬似宗教あるいは世俗化された政治社会的宗教である。全体主義運動とその権力は、神と宗教的制度(教会など)に取って代わり、ここでは指導者は神として崇拜され、公的な大衆集会は聖なる活動と見なされ、運動の歴史は救済の進展の聖なる歴史となり、敵と裏切り者はその聖なる救済の試みを妨げるものと見なされる。この世俗化された宗教には聖なる公式と儀礼だけではなく、運動を指導する人々によって決定される絶対的真理の名によって、絶対的服従を要求し、異端を地獄に落とすドグマ信仰がある。

全体主義イデオロギーあるいは社会―政治的宗教の公式の構造において本質的なものは、必然的な社会発展の法則への信仰である。そして、この法則を認識し、人民の真の利益を代表するエリート(共産党)の支配が、世界救済の必要条件である。この支配は制限されたものではない。個人と社会の全領域を包含し決定しなければならぬ。

このイデオロギーは、政治権力がすべての人と集団の生活の中心にならなければならないことを要求する。このドクトリンはスローガンと公式を課すが、指導部による真理の独占的な解釈・再解釈の権利は、全体主義政治に柔軟性を与える。³¹⁾

G・オーウェルは、しばしば、「スターリン主義体制」を恐怖のメシアニズムという観点およびカトリック教権制との類似性という視点から考察した。³²⁾ そのことによって二十世紀の全体主義的独裁制の構造を明確にしようとしたのである。出発点あるいは前提は、唯一正しい絶対的教義という観念である。この排他的真理を知る者はごく少数である。かれらは唯一の絶対的教義の正しい解釈者であり、無知な人民に宣べ伝える者である。人民は自己の真

の利益と真の願いを知らない。それゆえ、この少数のイデオロギー司祭は、全真理の所有者にして独占的解釈者であるばかりではなく、人民に全体的救済の道をさしのべる人々、真の自由と真の幸福を導く者たちでもある。歴史の必然性の客観的認識、その必然性への絶対的信頼を支えられて、これらイデオロギー司祭は権力独占を正当化する。なぜなら、人民を真の幸福へ導く道を知っているのは彼らだけだからである。権力は唯一絶対の真理の所有者（共産党）が独占しなければならない。この真理と権力の独占者（共産党）は、定義上あらゆる手段を用いる権利をもつ。真理の狂信的信奉と人民の幸福への確信が強ければ強いほど、真理の宣伝と真理の具体化をはかる制度・政策に反対する者、無関心な者、愚鈍な者にたいする苛酷な処置への欲求は大きくなる。人民はこの宣伝を受け入れ、政治・行政・経済・社会・文化の全領域における改造の試みを承認するだけでなく、進んでこの壮大な試みの実現に参加しなければならない。拒否する者、反対する者には厳しい手段を講じなければならない。人民の同意と支持をはかる尺度としての選挙は、限りなく100%に近い投票率と支持率で行われなければならない。この全員一致型選挙は、指導部への拍手喝采であると同時に、人民にたいする教育手段でもある。真理と権力の独占者にとって、憲法の民主性と恐怖政治、人民動員型選挙とあらゆる反対党の禁止との間にはなんらの矛盾も存在しない。人民は《真の人民》にならないからであり、真の自由を獲得し真の利益を実現して本当の幸福を享受しなければならぬからである。そのためには、あらゆる強制が加えられなければならない。「人民は自由であるべく強制される」のである。こうして「正しい」「高貴な」前提が恐るべき圧政に転化する弁証法が生じる。「目的は手段を正当化する」のである。

メシア主義的全体主義あるいは全体主義的民主主義は、絶対的な集団的目的という理念を追求し、これを達成することが自由の実現につながると主張する。その政治理念は、人間の思想と行動のいっさいを政治的・社会的意義

をもつものとして包摂する体系的哲学の一部であり、この哲学が生活の全分野を絶対的に支配したとき、はじめて政治の最終目的は達成されると主張する。しかし《現実の人間》の思想・行動は、体系的理想の排他的類型とは一致しない。絶対的目的という理念に人間的自由を調和させることは困難であるばかりではなく、両者はしばしば二律背反関係に立つ。この二律背反を突破する唯一の道は、人間を現にあるものとしてではなく、《あるべき人間》《あるはずの人間》においてとらえ、《現にある姿》は社会的・政治的矛盾の所産（仮象）であって、この矛盾をとり除けば本来の姿にもどる、あるいはあるべき存在になるという論理である。それゆえ、実際の生身の人間が絶対的理念にたがう限り、この現にある人間を無視し、強制し、威嚇して、理念に服従させても民主主義原理に反しないし、かえって真の自由を実現させる道である。理想的調和の状態が実現されれば、個人の自発性と義務の争いは消滅し、強制の必要もなくなる。こうして《真の自由》のための自由の否定、あるいは《自由》になるための強制の必要性という逆説の弁証法が成立する。

だがこの逆説の弁証法が恐ろしいのは、政治の最終目的の実現のためにすべての反対派を一掃することを正当化することである。理念による抑圧だけではない。理念を実現するために不可欠な権力の維持のためにも反対意見を封殺する。さらには権力のために権力を求めるという権力の本性に従って、苛酷な弾圧を行う。この権力の自己目的化には、他者の上に立ち自己の意志によって他者の行為を意のままに支配したいという権力欲と地位・名誉欲、出世願望、野心などありとあらゆる人間的本性——これらは歴史の喜劇を演じることによって歴史の無数の悲劇をもたらしてきた——がつきまとう。理想の徒花への欲望の結果。あるいは「あるべき人民」の創出という名目による「現にある権力欲」の剥き出しの充足。

他方、真理の独占的解釈者にしてその情熱的な実行者の団体内部においても、その能力、功績に応じて厳格に序

列づけられる。それはカトリック教権制に似て（聖なる序列）(hierarchy)である。最高位には偉大な指導者、世界プロレタリアートの父、人類の教師スターリンが君臨し、政治局と書記局、中央委員会の官僚制が党組織中央にそびえたつ。この位階制の原理は、同志の集団であるにもかかわらず厳格である。そして党・政府のノーマンクラツラ制度を構成するだけでなく、本来は人民の権力機構（自治機構）であるソヴィエトをも貫く。下位ソヴィエトはすぐ上のソヴィエトに代表を送り、そのソヴィエトはさらに上位のソヴィエトへ代表を送る……というように、代行制の原則によって位階制的に編成されている。（以上のようなマルクス主義の宗教的性格については、末尾の付録の図式を参照されたい。）

絶対的真理を掌握していると確信し、全人民の唯一可能で正しい利害を擁護していると信じている権力（共産党とその指導者）にとつては、世論がどうであれ、あらゆる手段を用いてその真理と利益を押し付けることは正当である。唯一正しい教義の所有者たちが、「誤謬」を流布させる自由、「正しい」社会制度、政治制度と道徳体系の適用を妨げる情報の自由を否定し抑圧するのは正当である。教義が唯一・絶対の真理を体现している以上、その教義に基づく思考様式と言葉以外の考え方や表現を禁止するのは当然である。不可謬の正統は、人民が考えることを妨げる。《考える》のはわれわれだ。きみたちは《信じる》だけでよい。そして《行動》せよ。信念（信仰）の実行を妨げる者は抹殺してもよい。たとえば、スターリンによって強制収容所送りにされた詩人マンデリシュタームの罪は《考え》、《表現する》ことであつた。

「わが支配者たちは、だれにも彼らの事に口出ししたり自分独自の判断をもつたりすることを許さなかつた。この観点からするとオシップ（マンデリシュターム）の詩は権力をもつ者から言論思想の権利を奪取しようとする

るまったくの犯罪行為であった。スターリンの敵たちの場合もスターリンの一派の場合と同様である。このおどろくべき自信はすっかりわが支配者たちの身につけてしまった。つまり意見をもつ権利は職務と地位と位階が決定しているものであり今後ともそうであろう、というのである。ごく最近のことだが、スルコフはパステルナークの小説がどうして悪いのか私に説明してくれた。ドクトル・ジヴァゴにはわが国の現実を判断する権利がない、われわれは彼にそういう権利を与えなかったのだから、というのである。⁽³³⁾

詩を書くという事実を「行為」と呼び、詩を「書類」と呼ぶ党のテロル官僚にとっては、各人すべての内面の議論を抹消するには、「沈黙の強制」は必要条件ではあっても十分条件ではない。人々から言葉を奪い去って「魂の抹殺」を行い、白紙の精神に公認の言説を刷り込むことがさらに必要なのである。

こうして、異論の禁止と非寛容は当然の帰結となる。さらに、正しい目的を実現するために必要とみなされる暴力(手段)が正当化されるだけでなく、暴力(力)が規範をつくることになる。ある知識人は、真理の最も苛酷な強制装置であり人間矯正装置である収容所の中で、真理の権力と権力の真理を学んだ。

「牢獄と収容所のなかでは人々はプラウダ(真理)と、これも真理という意味であるイスチナとの違いについて果てしなく議論していた。(中略) *verité*——英語の *truth*、ドイツ語の *wahrheit* にあたる——の同義語がイスチナ *istina* で、これは真理という抽象概念をも、それが適用される現実をも同時に包括する語なのである。反対にプラウダ *pravda* は純粹にロシア的な一つの概念、つまり理念という高い地位に達する高次の真理という概念である。」

「内務人民委員部（エヌ・カー・ヴェー・デー）にとつても党にとつても、イ、ス、チ、ナが表現する真理は存在していなかった。それはまったく相対的な、したがって容易に変更しうる概念であった。ひとり、プラウダが絶對的な真理であった。私にとつても、こうした学校流の論争に参与しなかった何百万人もの人々にとつても、あんなに多数の人の生命が純粹に言語学的なひとつの区別から、どのように影響を受けることができたのかを理解するのは困難であった。にもかかわらず、一見あまり重要でないこの相違が随意に白を黒に変えることを可能にする公式となつたのである。プラウダという概念が権力の基礎となつてしまつたのであり、異端審問以來、こうした例はひとつとして見あたらなかつたのである。

一九三六年、私に対する尋問者のなかでも最も知的なひとりから、私はひとつの返答をひき出すことができた。〈ある事実の眞実性はあなた方にはほんとうに全然価値をもたないのですか〉と私は質問したのであった。〈《党の眞理》というあの既成の眞理のみを、あなたは信じるのですか〉かれの返答は斷定的であつた。〈プラウダとは、今日わたしが『プラウダ』（新聞）の社説で読んだものを指し、この枠組のなかに入らぬものはすべて、客觀的には眞実ではない。きみの言う卓小なイ、ス、チ、ナなんか、問題にもならない。〉³⁴

党の眞理からすれば、モデルから逸脱する眞実は、眞実ではない（unreal）だけでなく、存在しないもの（the unreal）でなければならぬ。現実≡非現実というこの驚くべき等式を根拠づけるのは弁証法である。現実的なるもの（reality）は、つねに眞なるもの（the real）であるはずであつて、それから逸脱した否定的な現象は、外部の敵（帝國主義者）の仕業か、そうでなければそれと密通した内部の敵（人民の敵）のためである。かくして、共產党独裁の全体主義体制では、工場の事故も鉦山の爆發も、列車や飛行機事故もありえないし、環境破壊も起こりえ

ない。また非行もアル中も麻薬も売春もありえない。あるとすれば、外部からの精神汚染の結果である。なぜなら事故は、絶対的・相対的剰余価値の増大のみを唯一の動機・目的とする資本制生産企業において起こる現象であり、道徳的逸脱行動も物象化された社会における人間精神の倒錯の結果であるからだ。³⁵ 実際は、集権的命令経済のもとにおいて、ノルマ達成という至上命令——それを実現しなければサボタージュ、ひいては反社会主義の烙印を押されかねない——と、当該管理者の出世欲とによって安全性が無視され、技術と資金の欠如、さらに監視する世論の欠如のために公害が放置され、環境破壊が進行した。

このように正統的教義（マルクスレーニン主義イデオロギー）に基づく独裁制は、全体主義政治を本質的属性とする。これは、開かれた社会に敵対する体制である。ここでいう開かれた社会とは、情報、意見、移動における開放性だけでなく、意見と利害と権力の多元性を制度化した社会である。この開かれた社会に攻撃を加える全体主義独裁制は、現代におけるプラトン政治哲学である。³⁶ プラトンの政治哲学もマルクスレーニン主義のイデオロギ―も、ともに絶対的真理は存在するという公理を前提とする。現実には、この公理から導き出されたモデルに適合しなければならぬ。政治とは、この公理とモデルを認識した少数指導者によって、その社会成員に、行為においても思考においてもこの完全な理想モデルを理解させ、順応させることである。この思想によって人民を導く偉大な指導者がプラトンの王Ⅱ哲学者であり、共産党においては書記長と政治局・書記局である。その下に戦士階級（プラトン）と中央委員および各級カードル（共産党）がいる。かれらの使命は、無謬の教え（イデオロギ―）と具体的な指令を人民に教化し、実行させることである。このヒエラルキーの体系において人民は、上記の上層階級への物質補給のために労働に励まなければならない。すなわち職人あるいは労働者・農民である。かれらは、自らの労働が支えている理想モデルの全体系を認識できないが、公理の正しさとモデルの完全さを信じるように教えられ、

服従するよう強制される。服従を拒む者は教育Ⅱ再教育を強制され、たえざる監視の下におかれる。プラトンは『法律』のなかで、人々の会話を盗み聞きする秘密警察、市民同士の密告、さらには秘密裏の肉体的肅清を予想している。スターリン主義体制や毛沢東主義体制と同じく、プラトンの国家においても、文化は、音楽・演劇・舞踊・絵画・歌・詩・建築などから衣服のスタイルや肉体の訓練まで入念に規制された。

このように、プラトンの理想国家は、正しい市民の出現を可能にするための正義の権化である。プラトンの国家は、ソクラテスに対する死刑判決に見られるような、真理に対する虚構の勝利、善に対する悪の勝利、真なる尺度に対する暴力の勝利を阻止しなければならない。そのためには、個人を万物の尺度とする考え方、人間の尺度を最高規準とする考えを清算する必要があった。人間、つまり個人が万物の尺度であるなら、あらゆる利己主義の衝突から戦いが必然となるであろう。ソフィスト達の弁論術のように、この戦いの中に弱い者の抹殺と強い者（優れた者）の勝利の自然淘汰の表現を見るなら、その未来図は僭主とその力を擁護するにいたるであろう。この考え方はまた、ソクラテスの言うロゴスによる存在と仮象の統一、肉体の美は精神の美の象徴であり両者そろって完全性に達するという考えに対して、肉体の要求を正当化した。肉体は真理の規準であり（なぜなら知識は感覚に帰着するから）、善の規準であり（なぜなら善は快樂に還元されるから）、正義の規準である（なぜなら強いことは善いことであるから）。プラトンの国家のなすべき仕事はこのような要求の清算であった。

プラトンの理想国家は、正義のアイデアを目指して作り上げられなければならない。その結果として正義のアイデアが個人の中に見出されるようになることされる。ジャン・プランの構造分析に従えば、「プラトンにおいては、一種の上昇的弁論術（それによってプラトンは個人から国家へと進み、後者を原型として個人を作り上げ、このようにして心理学的社会学 psychosociologie を立っている）」と、下降的弁論術（それによって彼は、社会の構造からそれに

対応している個人の構造に移り、かくして社会心理学 *sociopsychologie* を立てている)とが見出される」のである³⁷⁾。プラトンの国家は三つの階級から構成される。そして各階級には人間の魂の三つの部分に対応している。すなわち、「鉄と銅の種族」である生産の階級(職人・商人)と「銀の種族」である防衛の階級(軍人)と「金の種族」である統治の階級(支配者)であり、それぞれには欲望(それに対応する徳は節制)、怒り(対応する徳は勇氣)、知性(対応する徳は思慮)という人間の魂の三部分が対応している。そして個人の場合、正義は魂の三つの部分の階級づけられた従属関係のうちにあるように、「国家は、それを構成している三つの階級の各々が自分自身の職能を果たすことによって正しい」とされる³⁸⁾。

プラトンは、理想的国家の組織化の手段、とりわけ教育について詳細に規定している。軍人たちの教育は体育と音楽によって行われるが、無氣力にする楽器(笛や多絃琴)や音楽は禁止される。また作家はよい物語のみを書くよう仔細に監督される。死を恐れさせる作品、神々を戯画化する作品、英雄が笑うさまを描いた作品は禁止される。そして子供の魂を形成するために乳母によい物語を用いさせる。芸術家は教育的、さらに徳育的な役割をもつ。上品で美しいもの、健康なものを製作しなければならない。そのために検閲や道徳上の秩序を制定している。

軍人階級と支配階級では共有制が支配する。とりわけ婦人はすべての者の共有であるが、優生学の規則が設定される。男と女の優れた者は頻繁に一緒にになり、劣った者は稀にしか一緒にするのはならない。とくに戦争等で卓越した若者には名誉その他の褒美、とりわけ婦人と頻繁に会う許可が与えられる³⁹⁾。子供も共有である。立派な身体のみが大切にされる。生まれるとすぐ委員の手に委ねられる。哺乳のできる婦人は、どれが自分の子か分からないうちが監視される。このような婦人と子供の共有は、市民相互の団結と同胞愛の最も確かな保証である。軍人はもはや、同胞の誰をも他人のように扱うことはできない。「なぜなら、彼が出会う者すべてにおいて、彼は兄弟や姉

妹を、父や母を、息子や娘を、あるいはこれら両親のすべての子孫や先祖を見ていると信ずる」からである。⁴⁰ プラトンがこのような妻子共有と財産共有を提案した理由は、私的な利益（家族と財産）は公共奉仕への全面的な献身を妨げるということである。

理想国家の支配者は、真理と幸福を知っている「哲学者」でなければならない。哲学者が王になり、王が哲学者になることが必要なのである。哲学者は、ものごとの理想的な本質、つまりイデアを知る人である。⁴¹ 彼は「金と銀の種族」の最も優れた子供たちの中から選ばれ教育される。彼らは公共の保育所に收容され、公共の学校で教育され、軍人として厳しい体育の訓練を受ける。二十歳になると、最も優れた者が選ばれ、一〇年間純粹数学の教育を受ける。三十歳で、その中の最も有能でかつ道徳的に優れた者が、五年間哲学的弁証法を学ぶ。三五歳で世間に出て、軍隊の指揮や下級行政職の経験を積む。これら長い教育と経験をすべて立派にやり遂げた者のみが哲学者となる。⁴²

プラトンの理想国家と同様に、共産主義国家においても各人は自己の存在の意味と自分自身の正当性を、党、より正確に言えば最高指導者（哲人王）において人格化された党の正しさのうちに見出さなければならない。このイデオロギー的、政治的忠誠命令に反して、独自に共産主義の理想を考え、語り、実践しようとしたり、マルクス・レーニン主義教義を解釈しようとする者は、共産主義全体主義においては許しがたい罪である。真理は最高指導者のみが具現するものだからである。レーモン・アロンのいう「イデオクラシー」(Ideocracy) は、このような教義と権力の人格化において完成する。⁴³

共産主義的全体主義は、万人に対して精神の充溢、調和、幸福を約束する。現在はたとえこの約束を守れなくとも、将来は必ず救われる、と信じさせる。現在の苦難が厳しければ厳しいほど、将来の救済は全面的であると約束

する。苦難に耐えることは、唯物史観の教義によって「義」とされる。苦難に耐え人類を救済することが「プロレタリアートの歴史的使命」だからである。この万人に対する幸福の約束は、全体主義の教義の秘儀的性格を示している。それは無神論の千年王国論、ユートピア思想である。

ユートピアは理想社会のイマジユであるが、その機能は既存の世界を批判し、否定することである。ユートピア思想は、人間と社会の不完全さにもかかわらず、その完全性をいま、ここに実現しようとする。人間と社会の悪を否定して、余すところなく善を実現しようとする。この善を実現する可能性を前提とするユートピア思想は、独裁政治への内在的な傾向を有している。邪悪な人間・階級・社会を作り変えることを必須とするからである。抵抗する者は容赦なく弾圧する。その意味でユートピア思想は、強制と暴力に結びつく可能性をもっている。

マルクスレーニン主義では、将来の理想社会の実現という歴史的使命に加わるものは、〈党〉において自己の存在の意味と正当性を見出さなければならない。なぜなら、歴史の法則とその法則から導き出される客観的真理を知っているのは共産党だけだからである。個人は誤ることはあっても、党は誤ることはない。党は無謬である。だが、この「党の無謬性」という神話だけでは完全ではない。客観的な真理は、偉大な指導者(カリスマ)において人格化されてはじめて現実的な真理になる。それはあたかもF・ヘーゲル政治哲学において、抽象的理念の自己展開を経て到達した理性国家は、君主において人格化されて初めて現実性を得るという奇妙な弁証法に似ている。市民社会の分裂態を止揚した理性国家(人倫的理念の現実性 Die Realität der sittliche Idee)では、国家市民(Staatsbürger)は絶対的共同性において絶対的自由を経験するとされるのだが、それを最終的に担保するのは君主である。

マルクスレーニン主義でも、プロレタリアートの歴史的使命を導くのは歴史の法則を認識している党であるが、

その党の無謬性は最高指導者において担保される。歴史法則の一般的真理は指導者の言動において具体性を帯びるからである。そこでは各人は、最高指導者によって具体化された真理に導かれて自己を改革し形成しなければならぬ。共産党独裁において指導者崇拜が必須のものとなるのはそのためである。M・ヴェーバーは、「レーニン・ゼクト」として活動するロシア社会民主党はやがてその支配の維持のために「指導者装置」を不可欠とすると予言した。⁽⁴⁾

各人は自己の存在の意味と自分自身の正当性を、党、より正確に言えば最高指導者において人格化された党の正しさのうちに見出さなければならない。このイデオロギー的、政治的忠誠命令に反して、独自に共産主義の理想を考え、語り、実践しようとしたり、マルクス・レーニン主義教義を解釈しようとする者は、共産主義的全体主義においては許しがたい罪である。真理は最高指導者のみが具現するものだからである。ナチス・ドイツにおいても、総統の人格によって具現された真理とそれを実践する権力に対する絶対的忠誠を要求した。〈イデオクラシー〉は、このような教義と権力の人格化において完成する。

では、なぜ、理性を武器とする知識人でさえこのような狂気の崇拜に陥るのだろうか。神なき宗教における人間の救済と偉大なる指導者への個人崇拜を、人間のナルシズム幻想の共同化として分析することもできる。ある集団あるいは社会の権威は、各人がそのナルシズム幻想の自己実現を断念し、その一部を自己以外の対象に投影することによって成立する。そして、ひとたび諸個人のナルシズム幻想の共同化として第三者（外的権威）が成立すると、日常的自己はこの外的幻想（共同幻想）に支えられない限り存在することはできない。このようにして日常的現実が形づくられ、維持される。

この外的な共同の権威は、各人のナルシズムの相続人である限り、いわば「聖なるもの、尊いもの、最高のもの

の、絶対的なもの」(岸田秀)として現れる。この聖なる権威に是認されなかつたものは、日常的現実から排除され、エス、抑圧されたもの(フロイド)、穢れたものを形成する。集団あるいは社会は、この「聖なるもの」・「日常的なもの」・「穢れたもの」三者の織りなすドラマとして存立し、その活動を展開する。

そのさい、集団(社会)が凝集性を高める必要が大きければ大きいほど、各人のナルシズムの私的幻想の投影としての最高権威は、それだけ聖なるものとして崇拜されなければならない。最高権威が聖なるものである限り、その多元化は許されない。二人の最高指導者の存在は、その集団(社会)の安定、いや存続そのものを危うくすることになる。どちらか一方はかならず、聖なるものに反する(敵対する)、それゆえ穢れたものに墮してしまふとされる。

このドラマのもう一つの特徴は、この最高権威はナルシズムの私的幻想の投影であるがゆえに、諸個人が(人)民であれ臣民であれ)みずから——強制されず——崇拜し、他者にも崇拜を強制することである。個人崇拜現象は、上からの操作と強制だけでなく、下からの自発的な——しばしば熱狂的な——支持に基づく。

このような集団(社会)は、しばしば、聖なる絶対者を頂点に《聖なる序列(イエラルシー)》の体系を形成する。このピラミッドにおいて、最底辺の者は聖なる絶対者によって是認され、正当化されていなければならない。でなければ、自己の存在根拠を喪い、日常的自己が崩壊するか穢れたもの(異端あるいは悪魔)に墮しめられる。中位の者の下位の者になりたいする権威は、聖なる絶対者の権威に由来するがゆえに、このイエラルシーの体系をあくまで支えなければならない。こうして、下位の者も中位の者も、最高位の聖なる者——権力と権威の源泉であるだけでなく道徳的正当性の源泉でもある——によって自己の存在を支え、正当化しなければならない。

このような個人崇拜現象の最高潮における「聖なるもの」と「穢れたもの」との対立が、狂気の人民動員型政治、

つまり純粋な穢れなき精神空間であるソヴィエト・ロシアに紛れ込んだ（ウイッチクラフト）たる「内部の敵」（「人民の敵」）を発見し、告発し、殲滅せよという肅清・追放劇を生み出すのである。「人民の敵」という恐ろしい言葉が猛威をふるって荒れ狂ったもう一つの要因は、聖なる人民（たとえば英雄スタハーノフや雷峰という理想の人民）のイメージの大量製作であった。

モスクワ見世物裁判をはじめとする肅清裁判のスペクタクルや強制収容所への追放劇において、おそろしい言葉、汚らしい言葉が夥しく投げつけられ、途方もない事実の歪曲・捏造が行われた。その根底には、すでにみたように、聖なるもの（党教権制）とその最高権威（スターリン）への絶対的帰依の心理的強制のメカニズムが存在した。虚構（幻想）としての聖なる絶対者は、その虚構を維持するために多くのものを排除し、抑圧しなければならない。神が存在するためには悪魔が必要であるように、聖なるものとそれに支えられ正当化されている日常的自己は、その存続、維持のために穢れたもの・悪魔的なものを必要とする。聖なるものと穢れたものとは、互いに相反照らしあうシンメトリカルな関係に立つ。それゆえ聖なる権威が完全であればあるほど、絶対的であればあるほど、抑圧と排除の欲求はそれだけ強くなる。政治的・道徳的正当性を確信していればいるほど、あるいは確信したいという欲求が強ければ強いほど、悪魔たる異端への憎悪は強まらざるをえない。聖なるものへの純化の欲求は、穢れたものへの抑圧を強化するのである。¹⁵⁾

これまで詳しく見てきたように、B・ラッセルはいち早く一九二〇年に、「狂信」と「憎悪」に彩られたロシア共産主義の悲劇を洞察していた。一九三〇年代には、G・オーウェルやアンドレ・ジイド、A・ケストラーなど著名な作家、思想家が少なからずソヴィエト共産主義の恐怖体制を分析していた。日本でも、林達夫はスターリン批判以前に、共産主義政治（思想・運動・組織・体制）に潜む狂気を剔抉していた。だがわが国には、東欧市民革命

とソ連崩壊を経験した二十世紀末にも、さらには二十一世紀になってもなお共産主義的全体主義独裁制の悲劇から目を逸らすだけではなく、これを擁護する人びと（政治家・政治活動家・労組活動家、学者・文学者・思想家・ジャーナリスト、市民活動家など）がいる。その代表的事例が、金日成主体思想の信奉者や北朝鮮への同伴者知識人たちである。周知のように、北朝鮮の支配体制原理（「国体原理」）は「主体思想」という名の完全な隷従思想である。それは「党の唯一思想体系確立の十大原則」という文書に収められている。それは北朝鮮の恐怖支配を支える狂気のイデオロギーである。その主要項目を引用しておこう。

一 「金日成主義による全社会の一色化の原則」

首領の革命思想で全社会を一色化することは、わが党の最高綱領であり、党の唯一思想体系を確立する事業の新しい高い段階である。

二 「絶対的忠誠の原則」

(1) 革命の英才であり、民族の太陽であり、伝説的英雄である偉大な金日成同志を首領に頂いていることを最大の幸福、最大の榮譽と思ひ、首領を無限に尊重し、欽慕し、また永遠に仰ぎ奉らなければならない。

(2) 生きているどの瞬間でもひたすら首領のために生き、首領のためには青春も生命も喜んで捧げ、どのような逆境においても、首領に対する忠誠という唯一の心情を持たなければならないことを肝に銘じなければならない。

三 「権威の絶対化の原則」

(5) 偉大な金日成同志の権威と威信を破壊するものは、たとえそれがどんなにささいな要素であっても非常

事件化し、非妥協的に闘争を展開していかなければならない。

(6) 敬愛する首領・金日成同志の肖像画、石膏像、銅像、肖像徽章、首領の肖像画を掲載した出版物、首領を形象化した美術作品、首領の現地教示板、党の基本スローガンなどを丁重に取り扱い、また徹底して保衛しなければならない。

四「信条化の原則」

(3) 偉大な首領・金日成同志の教示を無条件に受け入れ、それを尺度としてすべてを点検し、首領の思想意
思どおりに思考し、行動しなければならない。

(5) 偉大な首領・金日成同志の革命思想を学ぶ学習会、講演会、講習をはじめとする集団学習に欠かさず誠
実に参加し、毎日二時間以上学習する規律を徹底的に打ち立てて、学習を生活化し、また習性化して、学習
を怠けたり妨害する現象に反対して積極的に闘争しなければならない。

五「無条件性の原則」

(1) 偉大な首領・金日成同志の教示をすなわち法として、至上の命令として受け止め、どのようなささいな
理由も口実もつけることなく、無限の献身性と犠牲精神を發揮して、無条件に、徹底的に貫徹しなければな
らない。

六「統一・団結の原則」

七「共産主義的風貌・方法・作風の原則」

八「政治的生命の原則」

(1) 政治的生命を第一の生命と認識し、生命の最後の瞬間まで自分の政治的信念と革命的節操を曲げること

なく、政治的生命のためには、肉体的生命を草芥のごとく捧げることを知らなければならぬ。

(5) 二日および週の組織生活の総和に積極的に参加し、首領の教示と党政策を尺度として、自分の事業と生活を高い政治思想の水準から検討総和し、批判の方法で思想闘争を繰り広げ、思想闘争を通じて革命的に鍛錬し、間断なく改造していかなければならない。

九「全党・全国・全軍の組織規律の原則」

十「革命偉業継承の原則」

この異様な言葉からなる文書は、金父子独裁王朝の「国体原理」ともいうべきものであるが、要するに全党・全軍・全国民に対して、金日成が権力と真理と徳の唯一の源泉であることを示し、いかなる些細な疑問も反対も許さないことを命令したものである。このような現象は、スターリン全体主義体制や毛沢東全体主義体制（大躍進期・文化大革命期）でも共通に見られたものである。かつてソ連の忠実な友人であったフランスのノーベル賞作家アン・ドレ・ジイドが、現実のソ連に幻滅して、「ソ連では誰もが、いかなる問題でも一つの意見しかないことを知っている。『プラウダ』は毎朝、ソヴェト市民は何を知るべきか、何を考え、何を信じるべきかを教示する」（『ソヴェト紀行』）と批判したように、偉大な指導者と無謬の共産党は、人民の全体的救済の道を指し示して、「如何に行動するべきか」ということだけではなく「如何に考えるべきか」をも強制したのである。その結果、マルクス・レーニン主義や毛沢東主義、主体思想の図式の中で、人々が用いる言葉の語彙や統語法（シンタックス）は紋切り型に定型化され、感情や思想、芸術も極度に単純化されていった。こうして、個性的表現や意味の陰翳には疑いの目が向けられ、党の隠喩や反語法のレトリックが支配するのである。

この権力と真理の独占的所有者は、定義上あらゆる手段を用いる権利を持っている。真理に基づき人民の幸福を領道する指導者は、「人類の教師」「民族の太陽」「全知の神」として崇められる一方、真理の宣伝と具体化に反対する者、無関心な者に対しては苛酷な処罰が講じられる。そのさい、人民の自発的支持と服従を演出するために、偉大な指導者への人民の熱狂的な帰依の運動を組織化し、洪水のようなプロパガンダを繰り返す。北朝鮮において「唯一思想体系」によって演じられるスペクタクルは、喜劇的なまでにおどろおどろしい。北朝鮮の国策映画（「金日成のパレード」）や国営テレビの特集番組で描かれているように、金日成・金正日個人崇拜は、国家行事や「憎悪集会」などの巨大な人民動員や公式イデオロギーの叩き込みによって繰り返し再演されている。そして、肖像画や銅像、肖像徽章などによって日常化されている。それは、「宗教的な狂気に覆われた社会」（『月刊朝鮮』部長・劉正顯）の寒々とした光景である。このようなスペクタクル政治と「狂気と恐怖のシンフォニー」は、上述したように共産主義的全体主義の共通の現象である。

なぜわが国の知識人は、長い間、北朝鮮の現実⇨真実（リアリティ）を認識できなかったのであろうか。ここで、長い間わが国の左翼政党・知識人・市民が北朝鮮の現実を見ようとしてこなかっただけでなく、賛美・擁護さえしてきたのは何故かという問題を考えてみたい。朝鮮戦争勃発から数えて六二年、在日朝鮮・韓国人の北朝鮮への帰国運動から数えても五三年、長い間わが国の代表的なメディアや論壇雑誌で活躍するジャーナリストや知識人、また政党や市民の多くは北朝鮮の現実⇨真実を見ないどころか、賛美し擁護さえしてきた。だがその中であって、帰国事業開始直後に警告を発した在日朝鮮人がいた。それは、関（呉）貴星の『楽園の夢破れて』（一九六二年、全貌社、復刻版、一九九七年、亜紀書房）である。

一九六〇年八月、朝鮮解放一五周年慶祝日朝協会訪朝団の一員として「祖国」を訪れた関（呉）貴星は、すでに

次のように述べていた。「もしこの事実に目を覆い、従来通りの北朝鮮礼讃、帰国促進を続けていけば、恐るべき人道上の誤りを犯す恐れがあること。私はそれを倦まず訴え続けた。」朝鮮総連の迫害と家族からの義絶という堪えがたい苦しみのなかで、関氏は孤独な戦いを続けてきたが、しかし関の訴えは長い間無視され続けた。その結果、「恐るべき人道上の過ち」が犯され続けてきたのである。

恐るべき過ちを犯してきたのは、左翼政党・知識人・市民であった。現代日本を「代表する」といわれ、そう自負してきた総合雑誌・新聞とそれに依拠する知識人が、なぜ理解を超えようような北朝鮮擁護を繰り返してきたのか。民主主義をその原点（ラデックス）に立ち返って追求するという意味でのラディカルな民主主義者を自任する人たちが、全体主義の呪縛に囚われてしまうのか。この問題は、戦後日本の精神史、より限定して言えば戦後知識人の精神・思考構造にかかわる重要な問題である。ここ数年来の北朝鮮問題は、ある意味では、脱冷戦と五五年体制の崩壊後にもなお影響力を行使しようとしてきた戦後啓蒙主義者（知識人）の役割の終焉を画するものとなった。それゆえ、なぜ親北朝鮮となるのか、その思考様式と精神のメカニズムを整理し分析することは、それこそ一冊の本を必要とする大きな問題であるが、ここでは簡潔に次のような理由をあげることができる。

第一に、マルクス主義イデオロギー、第二に、植民地統治と歴史的責任、第三に、現代国際政治、第四に、全体主義的心性の四つの要因である。（そのそれぞれの要因はさらにいくつかのサブ要素に分けることができる。）ここではとくに、第二の植民地統治と歴史的責任について一言だけ触れておきたい。それは、加害者としての自己の内なる罪の告白と、自己処罰による精神的浄化と救済という問題である。そこには、次のような精神の転移の心的メカニズムがある。（罪ある国家・国民の贖罪）↓（そのような罪を生みだした伝統（社会・国家・精神）の否定）↓（その結果として陥る空虚な自己）↓（虚しさを埋めてくれる代替信仰への渴望）↓「情熱的な自己への転成」、

(付録)

マルクス主義の宗教的性格		
『ヨハネ黙示録』	予言の書	『共産党宣言』
悪の跳梁する社会	原罪	資本主義社会（搾取）
悪なる者		ブルジョアジー
選ばれた人々（民）		プロレタリアート
救世主の絶対性		最高指導者の絶対性
悪なる者の打倒		階級闘争と革命
千年王国	最後の審判	プロレタリア独裁
理想の国		共産主義社会
<p>「救済思想」＝マルクス主義の絶対的正しさへの宗教的信念（信仰） 変更不可能な教理（ドグマ）の支配：唯一神の絶対性。歴史発展の法則</p>		
<p>応用：カトリシズムと共産主義／金日成の神聖体制</p>		
<p>1) 徹底して唯一神を正面に掲げる。正統と異端が厳密に区別される。中世では異端は破門を宣告、焚刑に処された。共産党でも党から追放、粛清された。</p>		
<p>2) 正統理論のドグマ化＝教条化。疑問を差し挟むことも質問をすることも許されない。</p>		
<p>3) 北朝鮮では首領（金日成・金正日）が唯一神である。経典は主体思想。これに疑いを抱いたものは異端として断罪される。</p>		
<p>4) カトリック教会：唯一神信仰の上意下達体制＝法王と枢機卿。共産主義はマルクス、レーニン、毛沢東、金日成などの唯一神を奉じ、共産主義の正統理論の信仰の上意下達体制は共産党。共産党幹部は枢機卿。</p>		
<p>5) カトリック教会：法王の無謬性。共産主義：最高指導者の無謬性。北朝鮮では首領の無謬性。</p>		
<p>6) カトリシズム：未来の千年王国を提示。現在はそこへ行くための過渡的段階。共産主義：プロレタリア独裁が約束する王国への過渡期。夢の実現のためにすべてを犠牲にし、現在の苦痛を耐え忍ばなければならない。</p>		
<p>7) キリスト教の本質は愛であり、イエスの教えの核心。それと表裏の関係にあるのが徳目と容赦と和解。共産主義の本質は憎悪であり、階級の敵という名目で人々を殺してきた。</p>		

という精神の転移である。その根底には、汚濁にまみれた現代日本の精神への嫌悪と批判の反射として、清潔で純粹な北朝鮮の民衆、その精神革命の指導者（金日成・金正日）への高い評価、という心的メカニズムが存在する。

注

- (1) 『林達夫著作集5 政治のフォークロア』平凡社、一九七一年、二七八～九頁。
- (2) 同上、三二五～六頁。
- (3) S・ツヴァイク（内垣啓一・藤本淳雄・猿田恵訳）『エラスムスの勝利と悲劇』第六章「人文主義の偉大と限界」、『ツヴァイク全集一五』、みすず書房、一九七四年、九七～八頁。
- (4) Robert G. Tucker, *Philosophy and Myth in Karl Marx*, Cambridge University Press, 1964, p. 233, 236. マルクスの一九世紀資本主義への起訴状とその判決を厳しく批判したカール・ポッパーによれば、訴追の道德的基礎には賛辞を送っている。（開かれた社会とその敵』第二部）
- (5) 外川継男訳『共産主義黒書―犯罪・テロル・抑圧―ソ連編』「序 共産主義の犯罪」、恵雅堂出版、一九九七年。
- (6) 前掲書『共産主義黒書』二十一頁。
- (7) サルトル／カミュ他、佐藤朔訳『革命か反抗か』新潮文庫、六二頁。
- (8) 『共産主義黒書―ソ連編』一二五頁。
- (9) レイモン・アロン『知識人の阿片』、邦訳は小谷秀二郎訳『レイモン・アロン著作選集3 知識人とマルキシズム』荒地出版社、一九七〇年、二八〇～一頁。
- (10) レイモン・アロン、三保元訳『回想録1 政治の誘惑』みすず書房、二〇〇二年、十二章『知識人の阿片』三三八頁。ピエール・アンリ・シモン（キリスト教民主主義者）は、アロンの『知識人の阿片』を『カルフル』紙（一九五五年六月二十二日）で次のように批評した。「アロンが、彼自身としては改革主義に傾くのは、おそらく現実的な考えだからだろうが、私にはそれ以上に、人間的な配慮があったからのように思われる——『反抗的人間』の最終章に表われたカミュとおなじようだが、カミュとちがひアロンは、無能、資本主義擁護への恥ずべき協力などという知識人階級の辛辣な攻撃を受けることはないだろう。資本主義擁護の点については、問題は技術的になる。大衆の地位向上、貧困化傾向の歯止め、多額の出資をとまなわぬ公正な

秩序の創設などについて、プロレタリア独裁の神話より現実の解放の道のほうが適切かどうかである。政治は、暴力を回避する秘密をまだ発見していない。しかし、歴史的かつ絶対的真理に奉仕すると信じる暴力はいっそう非人間的となる。と書くレーモン・アロンを、倫理的見地からは、承認しないわけにはいかない。」(同上、三五九頁)

(11) アレクサンドル・ドーン、亀山郁夫訳『約束の地の奴隷』中央公論社、一九九一年、「訳者あとがき」二四三頁。

(12) レーニン「宗教に対する労働者党の態度について」一九〇九年、「レーニン全集」第五卷。

「ゴリキーあて手紙」、同『全集』三五卷、一一八頁～一二四頁。

(13) 『勝田吉太郎著作集』第六卷「現代社会と自由の運命」第五章「ソ連政権下の宗教弾圧」、ミネルヴァ書房、一九九四年。アロン、前掲書『知識人の阿片』二八二頁、二九二頁、三〇二頁のレーニン批判参照。

(14) 前掲書『約束の地の奴隷』序 歴史、または狂気のモザイク。なお、フリードリヒとブレジンスキーは全体主義独裁権力に対する最後の防波堤としてのキリスト教会の重要性を指摘している。それは、人間の尊厳と価値を守る砦である。(C. C. J.)

Friedrich and Z. K. Brzezinski, *Totalitarian Dictatorship and Autocracy*, New York, 1961, p. 262.

(15) 『勝田吉太郎著作集』第六卷、二二一～二頁。

(16) バートランド・ラッセル、中村秀吉訳『自伝的回想』みすず書房、二〇〇二年新装版、十三頁。

(17) バートランド・ラッセル、前掲書、四十一頁。

(18) バートランド・ラッセル、河合秀和訳『ロシア共産主義』みすず書房、一九九〇、一二四頁。

(19) 前掲書『ロシア共産主義』七頁、一六頁、三七頁。

(20) バートランド・ラッセル『自伝的回想』二四四～五頁。cf. Robert G. Tucker, *Philosophy and Myth in Karl Marx*, Cambridge University Press, 1964.

(21) K. Marx und F. Engels, *Historisch-Kritische Gesamtausgabe*, III, p. 134. 長谷川訳『経済学哲学草稿』光文社古典新訳文庫、二〇一〇年、二二二頁。

(22) マルクス『ドイツ・イデオロギー』、『マルクス・エンゲルス全集』第三卷、一九頁。

(23) cf. Robert Tucker, *Philosophy and Myth in Karl Marx*, Cambridge University Press, 1961, p. 151.

(24) マルクス「ヘーゲル法哲学批判序説」、『マルクス・エンゲルス全集』第一卷、大月書店、四一五頁、四二二頁。

(25) 「ユダヤ人問題に寄せて」、『マルクス・エンゲルス全集』第一卷、三九四頁。

- (26) 同『全集』第一巻、三九八頁、四〇二頁。
- (27) 「ハーゲル法哲学批判序説」、「マルクス・エンゲルス全集」第一巻、四二八頁。
- (28) マルクス(向坂逸郎訳)『資本論』(岩波書店、一九六七年)第一巻第一章第四節、一〇五〜六頁。
- (29) David Shub, *Lenin: A Biography*, The New American Library, 1951, p. 22.
- (30) 勝田吉太郎『現代社会と自由の運命』第六章「宗教思想家としてのマルクス——聖者マルクスの屍体解剖——」、『勝田吉太郎著作集』第六巻、二二四―五頁。なお勝田氏はすでに、一九六六年の「革命とインテリゲンチヤ」(『著作集』第三巻)で全く同一の分析を行っている。この一九六六年は、中国の文化大革命の開始の年であり、ソ連軍(ワルシャワ条約機構軍)による「ブラハの春」(一九六八年)の圧殺の前であったことに注目すべきであろう。
- (31) Waldemar Gurian, 'Totalitarianism as Political Religion', in: Carl J. Friedrich (ed.), *Totalitarianism, Proceedings of a Conference at the American Academy of Arts and Sciences, March 1953*, Harvard University Press, 1954, p. 122.
- (32) 小沼堅司『ユートピアの鎖』第四章「G・オーウェルにおける『大審問官』の主題の形成と展開」第五章「第二節『恐怖と狂気のシステム』」成文社、二〇〇三年。Also cf. G. Orwell, "Review of Russia under Soviet Rule by N. de Baskiy", *New English Weekly*, 12 January 1939, in *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, vol. 1; G. Orwell, "Revolt in the Urban Desert", *The Observer*, 10 Oct. 1943; G. Orwell, "Marx and Russia", *The Observer*, 13 Feb. 1948; J. Kirkpatrick, "Orwell's Hope, Orwell's Fear: 1984 as a *Rationalism and Reason in Politics*", in R. I. Savage, J. Combs and D. Nimmo (ed.), *The Orwellian Moment*, The University of Arkansas Press, 1989; Shlomo Avineri, *The Social and Political Thought of Karl Marx*, Cambridge University Press, 1969. (中村恒矩訳『終末論の弁証法』法政大学出版局、一九八四年)・E・ホッフアアー(高橋正昭訳『大衆運動』紀伊國屋書店、一九六九年)。
- (33) ナゼエジダ・マンデリシュタム(木村浩・川崎隆司訳)『流刑の詩人・マンデリシュタム』新潮社、一九八〇年)八七頁。
- (34) アンドレ・グリュックスマン(田村俣訳)『現代ヨーロッパの崩壊』(新潮社、一九八一年)一五四頁。小沼堅司、前掲書「ユートピアの鎖」第六章「自由の精神の軌跡」第三節「絶望——恐怖のソヴィエト社会とその批判——」参照。
- (35) チェルノブイリ原発事故(一九八六年)のちょうど一〇年前、訪ソした日本社会党の代表団の団長は、『ソ連の原発は、人民の汗の結晶であるがゆえに安全である。日本の原発は、労働者の搾取によって作られ運転しているがゆえに危険である』という趣旨の挨拶をした。事実は、民主的な世論によって監視されている自由な社会では、ひとたび事故を起こせば原発は稼働できない

いが故に、事故を起こさないよう細心の注意が払われてきた。権力によって事実が隠されているソ連のような社会で事故は多発した。

- (36) ジャン＝フランソワ・ルヴェル（岩崎力・西永良成訳）『全体主義の誘惑』新潮社、一九八一年（原著一九七六年刊）三三―三四頁、参照。
- (37) ジャン・プラトン（戸塚七郎訳）『プラトン』白水社、一九六二年、一二八頁。
- (38) プラトン（藤沢令夫訳）『国家』四卷四四―D、四三二B、『プラトン全集十一』岩波書店、一九七六年所収。
- (39) 『国家』五卷四五―D。
- (40) 『国家』五卷四六―C、G。
- (41) 『国家』五卷四七―G。哲学者たちは、「国家と人間の品性を受け取った上で、その画布の汚れを拭いてきれいにするだろう」という。（五〇―A）
- (42) 『国家』六卷・七卷で教育の順序と内容が詳細に書かれている。プラトンの理想政治は、君主制（ただ一人が支配）、あるいは貴族制（優者制）と呼ばれる。プラトンは、時の流れに従って陥るであろう理想国家の危機を予期している。すなわち墮落した政治の四類型であり、これには人間の四つの類型が対応している。第一は、榮譽制（timokratia）、第二は寡頭制（oligarchia）、民主制（demokratia）、僭主制（tyrannis）である。
- (43) Cf. R. アロン、前掲書『知識人の阿片』。R. Aron, *Democracy and Totalitarianism*, Part 3, Chapter 14, Ideology and Terror, Translated by Valence Lonescu, Frederick A. Praeger, 1969.
- (44) 小沼堅司『ユートピアの鎖』第一章「左翼全体主義支配のメカニズム」第四節「個人崇拜——国家儀礼とコミュニケーションの強奪」、成文社、二〇〇三年参照。
- (45) 小沼堅司、前掲書、長崎浩「共同体と救済の病理」序章「ハンナ・アレントとコミュニン主義」第一章「罪悪共同体 フロイトの集団論」、第二章「前衛党の心理学」、作品社、二〇一一年、岸田秀『ものぐさ精神分析』中公文庫参照。

（付記）

（*）本稿は、平成二二年度専修大学長期在外研究による研究成果の一部である。記して謝意を表したい。

（**）参考文献・資料一覧は、完結稿の末尾に一括して掲載する。